鳥越古墳

-広島市安佐南区緑井八丁目所在-

2017 公益財団法人広島市文化財団

はしがき

広島市安佐南区緑井地区は、背後に権現山を控え、山麓に広がる扇状地と太田川、古川、安川が 形成する沖積平野に中心街や住宅地が形成されています。この緑井地区とその北側の八木地区は、 太田川流域の中でも比較的、古墳がまとまって確認されている地域として知られています。また、 近世には雲石街道が通る交通の要衝であり、下流域の農業用水を確保するために八木用水が開削されるなど、歴史的な魅力にもあふれる町です。

広島市では平成26年(2014)8月20日,豪雨による土砂災害が発生し、緑井地区でも大きな被害を受け、多くの方が亡くなられました。今回、その対策として行われる砂防堰堤工事に伴って実施したのが鳥越古墳の発掘調査です。お亡くなりになられた方々への哀悼の意を表するとともに、被災された方々に心からお見舞い申し上げます。この報告書が一人でも多くの方に活用され、広島市域の歴史やこの地域の歴史のつながりを理解する一助となれば幸いです。

最後になりましたが、この調査にあたり、ご協力いただきました関係諸機関と関係者の皆様、ならびに調査に従事していただいた皆様に、厚くお礼申し上げます。

平成29年(2017)2月 公益財団法人広島市文化財団 文化科学部文化財課

例 言

- 1. 本書は,広島市安佐南区緑井八丁目における広島西部山系緑井地区砂防工事に伴い,平成27 年度に実施した鳥越古墳発掘調査の報告書である。
- 2. 発掘調査は、国土交通省中国地方整備局太田川河川事務所から委託を受け、公益財団法人広島市文化財団が実施した。
- 3. 本書の執筆・編集は、田村規充が行った。
- 4. 遺構・遺物の実測及び写真撮影は田村・桾木敬太が実施した。
- 5. 発掘調査に係る基準点の設置は、株式会社計測リサーチコンサルタントに委託した。
- 6. 本書に掲載したドローンによる航空写真の撮影は、株式会社四航コンサルタントに委託した。
- 7. 遺構の 3D レーザー測量は、株式会社計測リサーチコンサルタントに委託した。その成果を基 に調査前後の地形図、石室石材の図化は田村が実施した。
- 8. 第1図には、国土地理院による25,000分の1の地形図「可部」(平成12年修正測量・平成13年7月1日発行)・「飯室」(平成12年修正測量・平成13年7月1日発行)・「中深川」(平成26年調整・平成26年11月1日発行)・「祇園」(平成24年測量・平成25年7月1日発行)を、第2図には、同「中深川」・「祇園」を、第3図には、地理調査所による25,000分の1の地形図「祇園」(昭和25年第二回修正測量・昭和27年8月30日発行)・「深川」(昭和25年第二回修正測図・昭和27年2月28日発行)を複製して使用した。
- 9. 第4図の原図は、国土交通省中国地方整備局太田川河川事務所から提供を受けた。
- 10. 第5・6 図における基準点のデータは下記のとおりである。

基準杭 1: X = - 168496.000 Y = 29020.000

基準杭 2:X = - 168496.000 Y = 29030.000

- 11. 本書に掲載した挿図の方位は、第1・2・3 図以外は方眼北である。
- 12. 図版 1 は,米軍撮影の空中写真(1948年3月30日撮影 USA M870 A 2 58) を,2a・2b は国土地理院撮影の空中写真(2a:1966年11月12日撮影 MCG665X C8 17・2b:1974年12月23日撮影 CCG747 C3 1)の一部を使用し、遺跡の位置を注記した。
- 13. 図版 6b は、松田雅之氏から提供を受けた。
- 14. 図版 18a・19a・19b・20a・20b・21a・21b は、株式会社計測リサーチコンサルタントから 提供を受けた。
- 15. 本書に使用した遺構の略記号は以下のとおりである。

SX:壁を伴う平坦面

- 16. 土層断面図及び土器の色調は『新版標準土色帖』(37版 日本色研事業株式会社発行 2014年) に拠った。
- 17. 本発掘調査で得られた資料は、広島市教育委員会から委託を受けて、公益財団法人広島市文化財団文化財課において保管している。

目 次

Ι		めに ····································
Π	位置	せい と 歴 史 的 環 境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
\coprod	遺構	\$と遺物
IV	まと	39
		挿 図 目 次
第1	図	鳥越古墳周辺主要遺跡分布図(広域) 3
第2	図	鳥越古墳周辺主要遺跡分布図(八木・緑井地区)
第3	図	鳥越古墳周辺旧版地図6
第4	図	鳥越古墳周辺地形図
第5	図	鳥越古墳実測図(調査前)
第6	図	鳥越古墳実測図(調査後) 18
第7	図	土層断面図(南北)20
第8	図	土層断面図(東西)21
第9	図	石室掘り方実測図22
第10)図	石室外面実測図
第11	図	石室内面実測図25
第12	2図	S X 実測図 ······3 0
第13	3図	出土遺物実測図32
		付表目次
第1	表	八木・緑井地区の古墳
第2	表	出土遺物観察表
第3	表	石室幅比較表

図版目次

図版扉 鳥越古墳上空から市街地を望む(航空写真・石室検出時)

図版 1 昭和 23 年 (1948) 撮影 八木・緑井地区周辺広域空中写真

```
図版 2a 昭和 41 年(1966) 撮影 八木・緑井地区空中写真
```

- 図版 2b 昭和 49年(1974)撮影 鳥越古墳周辺空中写真
- 図版 3a 鳥越古墳と権現山・阿武山(航空写真・石室検出時)
- 図版 3b 鳥越古墳近景(航空写真·石室検出時)
- 図版 4a 鳥越古墳近景(航空写真·石室検出時)
- 図版 4b 鳥越古墳近景(航空写真·石室検出時)
- 図版 5 a 調査前全景 b 調査前全景
- 図版 6 a 調査前石室開口部 b 天井石落石前(平成 24 年頃撮影)
- 図版 7 a 墳丘除草及び山道撹乱層撤去後 b 墳丘除草及び山道撹乱層撤去後
- 図版 8 a 墳丘除草及び山道撹乱層撤去後 b A A' 土層
- 図版 9a A-A' 土層南側下層 b B-B' 土層石室内
- 図版10a B-B' 土層開口部前面 b B-B' 土層南側
- 図版11a C-C' 土層東側 b D-D' 土層
- 図版12a 石室検出後(航空写真・石室検出時)
- 図版12b 石室検出後(航空写真·石室検出時)
- 図版13a 石室検出 b 石室検出
- 図版14a 石室検出 b 石室検出
- 図版15a 石室検出 b 石室検出
- 図版16a 石室検出 b 石室奥壁外面
- 図版17a 石室東側壁外面 b 石室西側壁外面
- 図版18a 石室奥壁内面(合成) b 石室東側壁内面(調査前)
- 図版19a 石室東側壁内面奥側(合成) b 石室東側壁内面開口部側(合成)
- 図版20a 石室西側壁内面(調査前) b 石室西側壁内面奥側(合成)
- 図版21a 石室西側壁内面中央 b 石室西側壁内面開口部側(合成)
- 図版22a 石室基底石検出 b 石室基底石検出
- 図版23a 石室基底石検出 b 石室基底石検出
- 図版24a 石室基底石検出 b 石室基底石検出
- 図版25a 石室基底石検出 b 石室基底石検出
- 図版26a 石室基底石検出 b 石室基底石検出
- 図版27a 石室掘り方検出 b 石室掘り方検出
- 図版28a 石室掘り方検出 b S X
- 図版29a S X b 石室基底石及び S X
- 図版 30 出土遺物(1)
- 図版 31 出土遺物(2)
- 図版 32 出土遺物 (3)

I はじめに

広島市市民局文化スポーツ部文化振興課文化財担当(以下「広島市文化振興課」とする)は、平成26年10月9日に、国土交通省中国地方整備局太田川河川事務所(以下「太田川河川事務所」とする)から、同年8月20日の豪雨災害を受け、複数の砂防堰堤建設事業の予定があるとの情報を受けた。そのため、同年11月5日に広島県教育委員会と合同で、広島西部山系緑井地区砂防工事事業地内において現地踏査を実施した。その結果、事業予定地である広島市安佐南区緑井八丁目地内には周知の埋蔵文化財包蔵地として鳥越古墳が存在するため、11月25日付で太田川河川事務所あてに現状保存の必要がある旨の通達を行った。それに対し、平成27年1月27日、太田川河川事務所から工事にあたって鳥越古墳の回避が不可能である旨の協議があり、広島市文化振興課は計画変更は困難であるとの結論に至った。そのため広島市文化振興課は同年3月17日付で、開発前の発掘調査の実施勧告を行い、記録保存の措置を講ずることとなった。

そこで、太田川河川事務所は平成27年3月26日に、公益財団法人広島市文化財団(以下「文化財団」とする)に発掘調査の実施を依頼した。これを受け、文化財団文化科学部文化財課(以下「文化財課」とする)では、現地調査を平成27年5月11日から同年7月15日まで実施した。整理作業及び報告書作成は、文化財課が平成27年8月から平成29年2月にかけて実施した。

発掘調査の関係者は以下のとおりである。

調查委託者 国土交通省 中国地方整備局 太田川河川事務所

調 査 主 体 公益財団法人広島市文化財団 文化科学部 文化財課

調查関係者 堀内 雅晴 理事長

藤岡 賢司 常務理事

福永 治 常務理事

浜中 典明 常務理事

中田 英樹 常務理事

高野 和彦 文化科学部長

沼田 有史 文化財課長(平成 27 年度)

菊楽肇 文化財課長(平成28年度)

河村 直明 文化財課主任指導主事

高下 洋一 文化財課主任

調査担当者 田村 規充 主任学芸員

桾木 敬太 学芸員

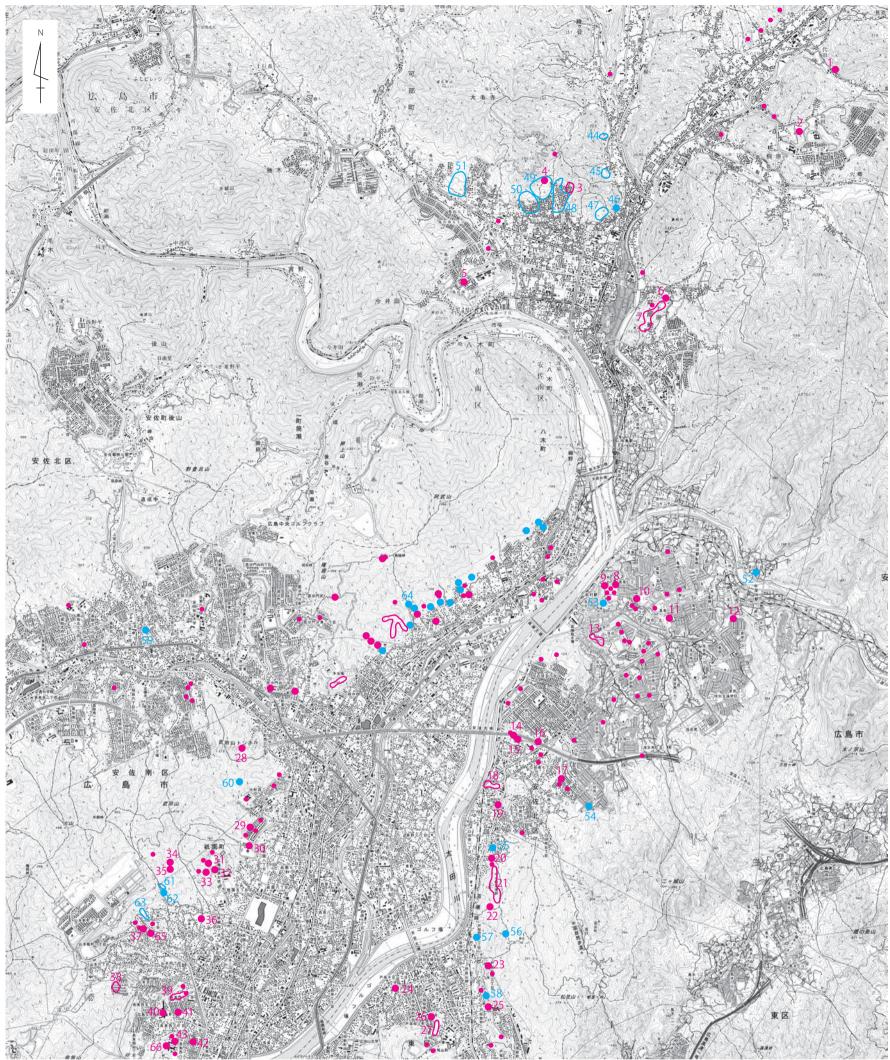
調査補助員 石本 浩子 植木 真澄 梶谷 ミエコ 加藤 恒子 川手 京子 古寺 正次

田中 実 高本 すがこ 戸田 絵己 土井 博之 舛田 愛子 宮下 洋昭

宮地 美穂 森田 美恵子 柳田 志信

整理作業員 菅原 彰子 住川 香代子 橋本 礼子

なお、太田川河川事務所、広島市文化振興課、地元の住民の方々には調査を円滑に進めるに当たって多大なご配慮とご協力をいただいた。また、調査にあたり、広島大学名誉教授 古瀬清秀先生から貴重なご指導、ご助言をいただいた。ここに記して謝意を表したい。



● - 古墳もしくは古代の遺跡 - 弥生時代~古墳時代前期頃までの遺跡 ● − 横穴式石室を埋葬施設とする古墳 なお、八木・緑井地区の遺跡名については第2図に記載している。

- 1. 高谷古墳
- 2. 山田古墳群(3基)
- 3.上ヶ原古墳群 E 支群(6基)
- 4.原迫第14号古墳
- 5. 虹山古墳
- 6.台古墳
- 7. 可部寺山古墳群(6基)
- 8. 真亀第1号古墳
- 9. 真亀第2号古墳 10. 恵下第1・2号古墳
- 11. 諸木古墳
- 12. 立石古墳
- 13. 地蔵堂山古墳群(4基)
- 14. 大明地古墳群(3基)
- 15. 月野瀬神社裏古墳
- 16. 大久保古墳
- 17. 道川古墳群

- 18. 弘住古墳群(5基)
- 19. 上小田古墳
- 20. 平野南古墳
- 21. 中小田古墳群(14基)
- 22. 山武士塚古墳群(3基)
- 23. 禅昌寺西遺跡
- 24. 宮の山古墳
- 25. 八幡山古墳
- 26. 桜ヶ丘古墳
- 27. 長尾古墳群(5基) 28. 津谷古墳
- 29. 大町七九谷古墳
- 30. 尾首古墳
- 31. 芳ヶ谷第1号古墳
- 32. 芳ヶ谷第3号古墳 33. 芳ヶ谷第2号古墳
- 34. 武田山憩の森西第1号古墳
- 35. 武田山憩の森西第2号古墳

- 36. 三王原古墳
- 37. 寺山古墳群(6基)
- 38. 空長古墳群(4基)
- 39. 池の内古墳群(5基)
- 40. 文化女子短大グラウンド遺跡
- 41. 亀岡遺跡
- 42. 大師古墳
- 43. 権地古墳

●横穴式石室を埋葬施設とする古墳

- 44. 九品寺北古墳群(2基)
- 45. 九品寺南古墳群(3基)
- 46. 水落古墳
- 47. 城ケ平古墳群(3基)
- 48. 上ヶ原古墳群(28基)
- 49. 原迫古墳群(13基)
- 50. 青古墳群(15基) 51. 給人原古墳群(16基)

- 52. 院内古墳
- 53. 真亀第3号古墳
- 54. 上矢口古墳
- 55. 平野古墳
- 56. 湯釜古墳
- 57. 惣田古墳
- 58. 龍泉寺古墳
- 59. 鶏頭原古墳 60. 大町古墳
- 61. 部谷山古墳群(2基)
- 62. 上組古墳
- 63. 浄円寺古墳群(3基)
- 64. 鳥越古墳

●古代の遺跡

- 65. 光見寺跡
- 66. 権地古墓

Ⅱ 位置と環境

1 位置と自然的・地理的環境

鳥越古墳は、広島市安佐南区緑井八丁目に所在する。緑井地区は、広島県の南西部を占める広島市域のほぼ中央部に位置している。

緑井地区の東側には太田川が流れる。太田川は安佐北区可部地区までは蛇行しながら東行してくるが、そこで大きく流路を南向きに変える。安佐南区八木地区では、太田川から古川が西に分流している。古川は太田川に平行して流れ、緑井地区の南で、安佐南区沼田町に端を発し、権現山と武田山(標高 410.5m)の間を東流してきた安川と合流している。その後、古川は安佐南区西原で再び太田川と合流する。なお、慶長 12 年(1607)まではこの古川が太田川の本流であったと考えられており 1)、古墳時代にはさらに西側を流れていたとする想定もある 2)。また、安川は昭和 30年(1955)に流路改修されるまでは古川に合流することなく南流し、太田川に合流していた。それらの主要な河川には、平行してそびえる山系からいくつもの支流が合流してくる。本古墳の西側に近接する鳥越川もその一つで、南東に流れ下りながら、本古墳の南側約 140m の位置で南に向けて植林川を分流する。鳥越川は南東に、植林川は南に流下して、現状では江戸時代に開削された古川の北を平行して流れる八木用水に合流する。植林川と八木用水の合流地点の至近からは松原川が分流し、古川に至り、八木用水は祇園地区を抜けた後に太田川に至る。

八木・緑井地区の西側には、北東から南西に向けて連なる阿武山(標高 585.94m)と権現山(標高 396.83m)がそびえている。両山の山頂間の低くなる場所は、鳥越峠(標高 306m)と呼ばれ、緑井地区と安佐北区安佐町筒瀬地区とを結んでいる。

権現山・阿武山には多くの支谷が形成されているが、阿武山側は直線的に下る流路であるのに対し、権現山側は曲線的な流路であり、開析が進んでいる。山麓にはそれらの小河川による小規模な扇状地が北東から南西方向に連なり、裾付近で合流扇状地が形成されている。本古墳も鳥越川が形成する扇状地の扇頂から少し下がった場所に位置する。砂礫の堆積や土石流によって形成された扇状地は本古墳の南東に向けて広がり、宅地や段々畑が連なっている。本古墳から扇端までは約500m、扇端の幅は約580mである。

扇端の南側には古川に沿って南北約 150~ 200m の幅の狭い沖積平野が北東から南西方向に広がり、沖積平野に平行して南北約 200~ 300m 幅で古川による自然堤防が存在している。沖積平野は、扇状地直下から南西に約 2km の間は幅狭で続くが、安川が東流する場所で幅を広げ、自然堤防と共にさらに南西の祇園地区へと至っている。

2 歴史的環境

緑井地区には現在,広島市中心部と可部地区を結ぶ JR 可部線や可部地区を経て島根県松江市へ抜ける国道 54 号が通っている。また南側に隣接する大町地区からは西の伴地区,五日市方面へ抜ける県道が通っており,地区一帯は交通の結節点である。

歴史的に見ると、古代においては、山陽道の安芸駅(安芸郡府中町に比定されている)から伴部



●後期古墳

1. 鳥越古墳

- 2. 別所古墳 3. 大畠古墳 4. 天井林古墳群(3基) 5. 足谷古墳群B支群(3基?)
- 6. 足谷第3号古墳(足谷古墳群A支群) 7. 足谷第2号古墳(足谷古墳群A支群) 8. 足谷第1号古墳(足谷古墳群A支群)
- 9. 上小原古墳群(4基) 10. 小原山古墳群(2基) 11. 原山古墳群(2基) 12. 上山古墳?(シンナシ古墳?)
- 13. 四本寺古墳群(2基?) 14. 宇那木神社古墳 15. 神宮山第2号古墳(箱形石棺) 16. 白山第2号古墳(箱形石棺)

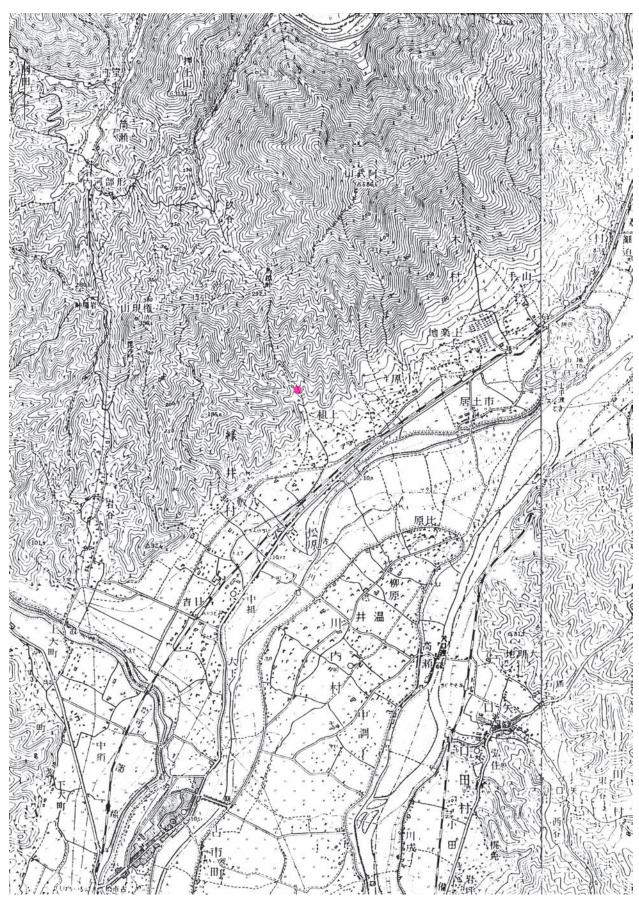
●前・中期古墳(時期不明のものも含む)

- 17. 光広古墳 18. 小原古墳 19. 大上(B)古墳 20. 大上古墳 21. 宇那木山第1号古墳 22. 宇那木山第2号古墳
- 23. 宇那木山第3号古墳 24. 宇那木山第4号古墳 25. 宇那木山第7号古墳(上山古墳) 26. 宇那木山第5号古墳
- 27. 宇那木山第6号古墳 28. 八敷第1号古墳 29. 八敷第2号古墳 30. 宇那木山南古墳 31. 鳥越峠西古墳
- 32. 権現山古墳 33. 神宮山第3号古墳 34. 神宮山第1号古墳 35. 白山第1号古墳

●弥生時代~古墳時代前期頃の遺跡

- 36. 細田遺跡 37. 細迫遺跡 38. 皆川山遺跡 39. 城山遺跡(地点1) 40. 城山遺跡(地点2) 41. 城山遺跡(地点3)
- 42. 水元貝塚 43. 中田公園遺跡 44. 足谷遺跡 45. 小原遺跡 46. シンナシ遺跡 47. 鳥越遺跡 48. 鳥越峠遺跡
- 49. 権現山遺跡 50. 毘沙門台東遺跡 51. 毘沙門台遺跡

第2回 鳥越古墳周辺主要遺跡分布図(八木・緑井地区・S=1/25000)



第3図 鳥越古墳周辺旧版地図(赤丸-鳥越古墳所在地·S=1/25000)

駅(安佐南区伴地区に比定されている)を結ぶルートは、東区戸坂地区を経て大町地区を通り、安川沿いを西に向かうと想定されている。また、「倭名類聚抄」³⁾における「佐伯郡」中の「緑井」(郷)が緑井地区に比定されており、「養我」(郷)については八木地区に比定する説と、「養須」の誤りで安地区に比定する説とがある。

中世には国人領主香川氏が太田川西岸に面する八木城に居城を構えており、また、近世には広島 と出雲・石見を結ぶ雲石街道が通り、太田川の舟運も含めて、広島城下と安芸北部の物資流通の舞 台ともなっている。

ここで緑井地区と八木地区を中心に古代以前の遺跡を概観してみたい。

縄文時代

縄文時代の明確な遺構は現在のところ確認されていないが、八木地区の中田公園遺跡からは早期のものと想定される石槍が、同じく八木地区の城山斜面からは後期のものと考えられる土器片が出土している⁴。

弥生時代

八木・緑井地区における弥生時代中期の明確な遺構は確認されていないが、緑井地区の神宮山古 墳群付近から中期中葉の壺形土器の一部が出土している 50。

弥生時代後期の遺跡としては、八木地区では細田・細迫遺跡⁶⁾、城山遺跡など、緑井地区ではシンナシ遺跡や鳥越遺跡、権現山遺跡などがあり、貝塚や土器包含層などから土器や石器が出土している⁷⁾が、阿武山・権現山の南東側では明確な集落の遺構は確認されていない。

近隣で発掘調査が行われた代表的な遺跡としては、安川に面した権現山南面の尾根上に形成された毘沙門台遺跡⁸⁰・毘沙門台東遺跡⁹⁰が挙げられる。両遺跡は権現山から隣接して派生する尾根上に立地し、同時期の遺跡であることから、まとまった集落であると考えられている。確認された竪穴住居跡が合わせて 160 軒を超え、広島湾岸における最大規模の集落遺跡である。

古墳時代

緑井・八木地区を含む太田川下流域の古墳時代前期の古墳としては、東岸の安佐北区口田地区の 弘住古墳群や中小田第1号古墳で特筆すべき調査成果が得られている。弘住第3号古墳は3世紀 末葉のものと想定される直径約25mの円墳で、墳丘の東西に突出部を持つ。河原石と割石を使用 した竪穴式石室からは、鉄槍1点や鉄鏃31点、やす6点などが出土している¹⁰⁾。また調査は行 われていないが、弘住第1号古墳は全長約40mの前方後円墳である。中小田第1号古墳は4世紀 中葉のものと想定される全長約30mの前方後円墳で、竪穴式石室からは三角縁神獣鏡1面や車輪 石1点などが出土している¹¹⁾。

緑井地区においても宇那木山第2号古墳,神宮山第1号古墳といった広島湾岸を代表する古墳が存在している。宇那木山第2号古墳は権現山から南東に派生する尾根上,標高約132mに位置する全長約40mの前方後円墳で,後円部に2基の竪穴式石室が構築されている。全長約3m,幅約1m,深さ約1mの北側の竪穴式石室から画文帯神獣鏡1面が出土し,もう1基の全長約3.6m,幅約1.2m,深さ約1.4mの石室からは珠文鏡1面などが出土している。3世紀末葉~4世紀初頭

の時期が想定されており、広島湾岸でも最古級の古墳として認知されている¹²⁾。神宮山第 1 号古墳は権現山から南に派生する尾根上に位置する全長約 28m の前方後円墳と想定される古墳である。3 基の竪穴式石室から鉄製品や玉類、内行花文鏡と想定される鏡片などが出土しており、時期は 4世紀中葉に想定されている¹³⁾。

こうした前期の古墳は、現在よりも内陸に位置していた海岸線の河口付近の丘陵上に築かれていることから、内海の海運を管理・掌握していた首長墓と考えられている。

古墳時代中期の古墳としては、東岸では安佐北区口田地区の中小田第2号古墳や東区戸坂地区の長尾古墳群、西岸では安佐南区祇園地区の池の内古墳群や空長古墳群、三王原古墳などが特筆される。中小田第2号古墳は、5世紀中葉のものと想定される直径約20m程度の円墳で、竪穴式石室から三角板鋲留短甲・横矧板衝角付冑・鏃83点などが出土している¹⁴⁾。長尾第1号古墳は4世紀後半~5世紀初頭のものと想定され、広島市域最大の全長約42mの前方後円墳である¹⁵⁾。5世紀中葉のものと想定される池の内第2号古墳は円筒埴輪や朝顔形埴輪が据えられた径約28mの円墳である¹⁶⁾。5世紀後葉のものと想定される空長第1号古墳は竪穴系横口式石槨を埋葬施設とし、蛇行剣身や三輪玉が出土している¹⁷⁾。三王原古墳では竪穴式石室から鏡や玉類、短甲、鉄製武具などが出土している¹⁸⁾。

緑井地区でも中期古墳と想定される大上古墳・大上(B)古墳があり¹⁹,近接する安古市地区では, 権現山から南へ派生する尾根に位置する白山第1号古墳から短甲片が出土している²⁰。

この他に、前期古墳か中期古墳かの判断はできないが、埋葬施設が横穴式石室ではない古墳として、緑井地区では、宇那木山第3~7号古墳や全長約18mの前方後円墳と想定されている八敷第1号古墳、権現山古墳などが、八木地区では、足谷古墳・光広古墳・小原古墳が知られている²¹⁾。中期の古墳は、前期同様の立地であり内海の海運に関係する首長墓と考えられている。また、武具類の副葬が多いことから畿内政権の軍事に関わる首長像も想定されている。

古墳時代後期の古墳としては、東岸の高陽地区では院内古墳・真亀第3号古墳・上矢口古墳・平野古墳・湯釜古墳、戸坂地区の惣田古墳、龍泉寺古墳などで横穴式石室が確認されている²²⁾。このうち、上矢口古墳・湯釜古墳については、古式のいわゆる九州型の横穴式石室を持つ²³⁾。また、惣田古墳からは皮袋形提瓶が出土している²⁴⁾。西岸の祇園地区では上組古墳、部谷山古墳群(2基)などで横穴式石室が確認されている²⁵⁾。前期・中期古墳と比較するといずれの地区も古墳数が減少している。

一方,太田川を挟んで八木地区の北側対岸にあたる可部地区では,福王寺山(標高 495.91m)山麓の東から南面に 80 基以上の古墳が確認され,可部古墳群と総称されている。多くは 3 基以上で,中には 10 基以上で群をなす群集墳が形成されている。可部地区の前・中期古墳は数量・規模とも他の地区と比較すると見劣りがする。それにも関わらず,後期になると太田川下流域で最も集中して古墳が築造されている²⁶⁾。

緑井地区でも高陽・戸坂・祗園地区と同様、後期古墳の数は減少する。一方、前・中期古墳がほ

とんど確認されていない八木地区では集中的に古墳が築造されている。八木地区の後期古墳を見ると、阿武山から派生する尾根と扇状地の境付近の斜面上に $2 \sim 3$ 基程度のまとまりで築造されている例が多い。しかし、緑井地区では、四本寺古墳群のみ 2 基で群をなすものの、宇那木神社古墳 277)、上山古墳 288)、そして本古墳とそれぞれ独立して築造されている。

太田川河口付近の後期古墳は、詳細が不明だが、同じ広島湾岸の安芸区船越地区の新宮古墳²⁹⁾ や安芸郡海田町の畝観音免第 1・2 号古墳³⁰⁾ については、その立地から内海の海運を管理・掌握していた首長墓と考えられている。また、太田川下流域でも比較的内陸の可部地区では前代よりも古墳数が大きく増加していることから、畿内政権と深い関わりを持つ集団によって群集墳が形成されたと想定されている。

注

- 1) 「保田家系譜」『佐東町史』広島市役所 1980年
- 2) 高下洋一「太田川下流域における約 1700 年前の地形復元について」『研究連絡誌 II』 財団法人広島市文化 財団 2003 年
- 3)「安藝國第百十六」『倭名類聚抄』 承平年間(931~38)
- 4) 福谷昭二「第二章 佐東町のあけぼの」『佐東町史』広島市役所 1980年
- 5) 4に同じ
- 6) 佐東町教育委員会『広島県安芸郡佐東町 細田遺跡・細迫遺跡調査概報』 1968 年
- 7) 4に同じ
- 8) 毘沙門台遺跡発掘調査団『毘沙門台遺跡発掘調査報告』
- 9) 広島市教育委員会『毘沙門台東遺跡発掘調査報告』 1990年
- 10) 広島市教育委員会『弘住遺跡発掘調査報告』 1983 年
- 11) 潮見浩編『中小田古墳群』広島市教育委員会 1980年
- 12) 脇坂光彦・小都隆『百聞よりも一見 探訪・広島県の考古学』渓水社 2013年
- 13) 4に同じ
- 14) 11に同じ
- 15) 広島市教育委員会『長尾古墳群発掘調査報告』 2001 年
- 16) 広島市教育委員会『池の内遺跡発掘調査報告』 1985年
- 17) 広島市教育委員会『空長古墳群発掘調査報告書』 1978 年
- 18) 中田昭「広島市祇園町三王原古墳について」『芸備第1集』 1973年
- 19) 4に同じ
 - 広島県教育委員会『広島県遺跡地図X(広島市)』 2004年
- 20) 広島県立可部高等学校『はにわ創刊号』 1962 年
- 21) 19 に同じ
- 22) 広島県教育委員会『広島県遺跡地図X (広島市)』 2004 年 木村八千穂 / 木村足穂 / 木村伸次 編『戸坂町誌』戸坂町誌編さん所 1977 年
- 23) 妹尾周三「広島市安佐北区湯釜古墳について」『芸備第16集』芸備友の会 1986年
- 24) 広島市『戸坂村史』 1991年
- 25) 広島県教育委員会『広島県遺跡地図X(広島市)』 2004年
- 26) 井手三千男 / 善入義信『可部古墳群ー目で見る給人原古墳群ー』はにわ会 1974 年 広島県立可部高等学校『はにわ第 2 ~ 13 号』 1963 ~ 1974 年 財団法人広島市未来都市創造財団『上ヶ原遺跡・上ヶ原第 34 号古墳』 2011 年
- 27) 19に同じ

- 28) 上山古墳は、『全国遺跡地図 広島県』(文化庁 1983)で所在地「佐東町緑井上山」と掲載され、『広島県遺跡地図X(広島市)』・『広島市遺跡分布地図』(広島市教育委員会 2002)では、第2図25の位置になっている。しかし旧字名の「上山」は「植林」・「鳥越」を挟んだ東側、「大上」の北側にあり、明らかに25の位置ではない。『広島県遺跡地図X(広島市)』において「上山」にあり、横穴式石室を埋葬施設としている古墳は「シンナシ古墳」で第2図12の位置である。しかし、『全国遺跡地図 広島県』におけるシンナシ古墳はこの位置より東側にある。さらに、『佐東町史』にはシンナシ古墳の記載は無いが、シンナシ遺跡の位置が第2図46の位置で掲載されている。これらのことから、本報告書では、第2図12の位置を上山古墳とした。
- 29) 広島市役所『船越町史』 1981 年
- 30) 広島県安芸郡海田町教育委員会『畝観音免古墳群』 1979 年 広島県安芸郡海田町『海田町史 資料編』 1981 年

第1表 八木・緑井地区の古墳

※現状の欄が空白のものは、基本的に残存している

上海力化	想定時期		墳丘(数値- m)		埋葬施設	埋葬施設 (数值- m)		7H 4D	第2図	/++: -+x			
古墳名称	区分	時期	形状	規模	種類	規模	遺物	現状	番号	備考			
八木地区													
										『佐東町史』には足谷			
足谷古墳	前期?				箱形石棺 箱形石棺			位置不		第3号古墳をのぼった			
上 台白垻	削粉红				相形石怡			明		場所で、箱式石棺群と			
										掲載			
							勾玉1・管						
光広古墳	前期?						玉2・鉄刀	全壊	17	 光広神社境内内			
) DALIS	. 16756						1・鏡と伝	1.41	' '	76/41年14元1111			
							わる						
)/ Ifm =				februari () ()								
小原古墳	前期?				箱形石棺				18				
						長:4.0				財団法人広島市文化			
別所古墳	後期	6c 末~	円墳	径6程度	横穴式石室	幅:1.3	須恵器・鉄	全壊	2	財団『別所古墳発掘			
<i>//1/// 口包</i>	1279]	7c 前半	1175	庄 0 往及	极八八五	復元高:1.9	滓	工权		調査報告』2010年			
大畠古墳	後期				横穴式石室	(X) E/A) * 1.0		全壊	3	別所古墳と同一か?			
天井林										337111 X 0 1 3 1 1 1			
第1号古墳	後期		円墳	径 9	横穴式石室?				4				
						長:4.4							
天井林	後期		円墳	径8	横穴式石室	幅:1.5	須恵器・鉄		4				
第2号古墳				負					高さ:1.93	刀			
天井林								全壊・					
第3号古墳								位置不	4				
お り 万 白 垻								明					
							須恵器(坏						
		6c 後半				残存長:3.6	蓋3・坏身						
足谷	後期	~	円墳	径 10	横穴式石室	幅:1.3	4)・鉄製馬	全壊	8	 A 支群			
第 1 号古墳		7c 初頭 円項 住 IU		幅・1.3 高さ:1.4	具片(三連	土坂		11 AH					
		101/194				III, C · 1.4	の環状のも						
							の)						

古墳名称	想定	(時期	墳丘(数値- m)	埋葬施設	(数値- m)	遺物	現状	第2図	備考
口坝石柳	区分	時期	形状	規模	種類	規模		5元 1八	番号	加 与
足谷 第2号古墳	後期		円墳	径 10			須恵器・鉄 器	全壊	7	A 支群
足谷 第3号古墳	後期		円墳	径 10	横穴式石室			全壊	6	A 支群
足谷 第 4 号古墳	後期		円墳	径 8.5	横穴式石室			全壊	5	B支群
足谷 第 5 号古墳	後期				横穴式石室			半壊	5	B支群
足谷 第6号古墳	後期							全壊	5	B支群
上小原 第 1 号古墳	後期	7c 前半 ~中葉			横穴式石室			宅地造 成によ り全壊	9	
上小原 第2号古墳	後期	7c 前半 ~中葉			横穴式石室			宅地造 成によ り全壊	9	
上小原 第3号古墳	後期	7c 前半 ~中葉			横穴式石室			宅地造 成によ り全壊	9	
上小原 第 4 号古墳	後期	7c 前半 ~中葉			横穴式石室			宅地造 成によ り全壊	9	
小原山 第 1 号古墳	後期	6c 後半	円墳	径 15	横穴式石室	長:7.6 幅:1.2	須恵器 (坏 蓋 2・は 高 で 2・は 十 で で 2・は 手 で 3・		10	
小原山 第2号古墳	後期		円墳	径8	横穴式石室	長:4.7 幅:1.2	須恵器片・ 鉄鏃片		10	1961年,可部高等学 校により,石室床面の 清掃調査が行われた。
原山 第1号古墳	後期				横穴式石室			消滅?	11	
原山 第2号古墳	後期				横穴式石室			消滅?	11	
緑井地区										
宇那木山 第1号古墳	前期	4c 前葉	円墳	径 10	箱形石棺	長さ:1.8 幅:0.4 深さ:0.3	石枕を伴う 人骨大小 2		21	

上述われ	想定時期		墳丘(数値- m)		埋葬施設	(数値- m)	m) vik tile		第2図	(达 · +x.
古墳名称	区分	時期	形状	規模	種類	規模	遺物	現状	番号	備考
				ΛE - 40	竪穴式石室 (北側)	長さ:3 幅:1 深さ:1	画文帯神獣 鏡 1・土 師 器			2000 ~ 2002 年, 広
宇那木山第2号古墳	前期	3c 末	前方後 円墳	全長:40 後円部高 さ:3.5	竪穴式石室 (中央)	長さ:3.6 幅:1.2 深さ:1.4	珠文鏡 1· 鉄短剣 1· 鉄槍 1·鉄 斧 1·鉄鉇	1	22	島大学により、部分的 に学術調査が行われ た。
宇那木山 第3号古墳	前期?		円墳	長径:11 短径:7					23	
宇那木山第4号古墳	前期?		円墳	径 7					24	
宇那木山 第5号古墳	前期?		円墳						26	
宇那木山第6号古墳	前期?		円墳	長径:18 短径:10					27	『佐東町史』における 3号古墳か?
宇那木山第7号古墳(上山古墳)	前期?		円墳	径 9~10	箱形石棺?				25	県・市の遺跡分布図では上山古墳となっているが、字名と場所、埋葬施設が異なるため、誤認と考えられる。宇那木山古墳群と同一の尾根にあるため、便宜上、宇那木山第7号古墳とした。
八敷 第 1 号古墳	前期?		前方後 円墳	全長 約 18					28	
八敷 第 2 号古墳	前期?		円墳	径 6					29	
鳥越峠西古墳	前期?								31	
権現山古墳	前期?				箱形石棺(1号)	全長:1.62 幅:0.48 深さ:0.5			32	
7世/北田 口 好	前期?				箱形石棺(2号)	残存長:0.9 幅:0.4 深さ:0.4			02	

Lik bat.	想定時期		墳丘 (数値- m)		埋葬施設 (数値- m)		Arth at .	411 TD	第2図	H1 14	
古墳名称	区分	時期	形状	規模	種類	規模	遺物	現状	番号	備考	
						竪穴式石室 (A 主体)	全長:2.9 幅:1.5 深さ:1.5	鉄剣1・鉄 鏃片・ガラ ス小玉・管 玉1			
神宮山第1号古墳	前期	ற்ற 4c 中葉	前方後円墳?	全長約 28	竪穴式石室 (B 主体)	幅:約1.5 深さ:約2	水晶製算盤 玉3, 碧玉 製管玉3, ガラス小玉 約150, 鏡 片		34	広島大学により、一部 発掘調査が行われた。	
					竪穴式石室 (C 主体)	全長:1.9 幅:0.5 深さ:0.5	翡翠製勾玉 3, 碧玉製 管玉約80, メノウ製管 玉1, 水晶 製算盤玉9, ガラス小玉 約300				
神宮山 第3号古墳	前期?								33		
大上古墳	中期				箱形石棺		人骨・須恵 器・土師器	全壊	20	県・市の分布図では第 2図19の位置にある が、『佐東町史』では 第2図20の位置とな る。 『新修廣島市史』では 大上1号墳とあり複数 基あった可能性も考え られる。	
大上 (B) 古墳	中期				箱形石棺?		須恵器片・ 土師器片散 乱		19	現在お堂のある場所より少し高い位置にある。県や市の分布図では大上古墳であるが、前出のものと区別するため便宜上(B)を挿入した。	
宇那木山南 古墳	後期?		円墳	長径:12 短径:10					30		

Little for all	想定		墳丘(埋葬施設	(数値— m)	hath of f	20 II	第2図	ttle te
古墳名称	区分	時期	形状	規模	種類	規模	遺物	現状	番号	備考
上山古墳? (シンナシ古 墳?)	後期?		円墳?	径 10 ?	横穴式石室?		須恵器・鉄 器?	全壊?	12	県・市の分布図では第 2図25の位置に示さ れているが、字名「上 山」はこの位置果、はな 大石しるが、字名ではな穴 式むしろ、シンナションを としてがが上山とあり、 シンはの場所ではにおいてが ない、第2図12 の場所とした。デロとした。 が12の場所とした。デロとは は関連にはないで、のものではないが、 はないが、 にないが、 はないが、 はないが、 になっている。 になってい。 になってい。 になっな。 になっな。 になっな。 になっな。 になっな。 になっな。 になっな。 になっ
四本寺第1号古墳	後期	6c 中葉 ~後葉	円墳	径 15	横穴式石室	長:7.3 幅:1.88 高さ:1.7	須恵器(坏 蓋8・坏身 9・ 壺 1・ 広口長頸壺 1		13	1961年, 崇徳高等学校により, 石室奥壁部分の発掘調査が行われた。
四本寺 第 2 号古墳	後期		円墳		横穴式石室			位置不明	13	位置的には、上山古墳で記したデータがこの 古墳のものである可能 性も考えられる。
宇那木神社 古墳	後期				横穴式石室	長:3 幅:1.8			14	『佐東町史』における 宇那木山四号古墳
神宮山第2号古墳	後期	6c 前半	円墳?		箱形石棺		須恵器 (坏蓋2・坏身 2・提瓶1・ はそう1)・ 鉄刀1	全壊	15	1959年,広島大学により,破壊前に緊急調査が行われた。
	安古市地区									
白山 第1号古墳	中期				箱形石棺?		短甲片・鉄 斧1・鉄槍 1・鉄鋤1	l	35	
白山 第2号古墳	後期	6c 前半			箱形石棺		勾玉1・管 玉2・鉄鏃 4・刀子1・ 頭骨	全壊	16	広島県教育委員会『白 山城跡発掘調査概報』 1973年

広島県教育委員会『広島県遺跡地図X(広島市)』2004年・広島市教育委員会『広島市遺跡分布地図』2002年・広島市役所『佐東町史』1980年・広島市役所『新修廣島市史 第七巻 資料編その二』1960年などを基に作成

Ⅲ 遺構と遺物

1 古墳の立地と調査前の現状 (第4・5図)

鳥越古墳は、広島市安佐南区緑井八丁目に所在する。本古墳は阿武山山頂から南西に派生し鳥越川に沿って南東に向きを変えた尾根とその西側の扇状地との境付近、標高約72mの緩斜面上に位置している。しかし、調査前の現状では畑地に立地しており、一見、平坦面上に築かれたような印象を受ける。扇状地直下の平地からの比高は約60mである。古墳の約30m東側には阿武山から派生する別の尾根の急斜面が屹立し、麓には水路が形成されている。また、古墳の約60m西側には鳥越川が流れているが、そこまでは古墳の立地する畑が続いている。畑の北側は現状で、木々が茂っている状態の段々畑がさらに上流へと続き、南側は畑を一段挟んで宅地が広がっている。

古墳の北側に隣接して、鳥越峠へ向かう山道が南東から北西方向に通っており、古墳の北側の一部にかけてアスファルト舗装がされている。地元の方によれば、以前、砂防工事を行った際に山道を拡幅して、アスファルト舗装を行ったとのことである。舗装が途切れた地点からは、中央に鳥越川沿いに鳥越峠へ向かう山道、東側に尾根筋を登る山道、西側に鳥越川に行き着く幅広の未舗装道路という三つの道に分かれている。

古墳付近の南東側では山道と古墳の立地する畑には段差があり、石垣が築造され、古墳の南東側は墳丘が大きく削平されている。古墳の北側には山道の南端が接しており、段差はほとんど無いため石垣は築かれていない。

古墳の北西側には農作業用資材を収める小屋が建設されている。小屋により墳丘北西部は方形に 削平され、石室奥壁と西側壁の石材外面の一部が露出している。小屋の入口側では露出した石室石 材に繋げる形で腰高程度の石垣を構築している。

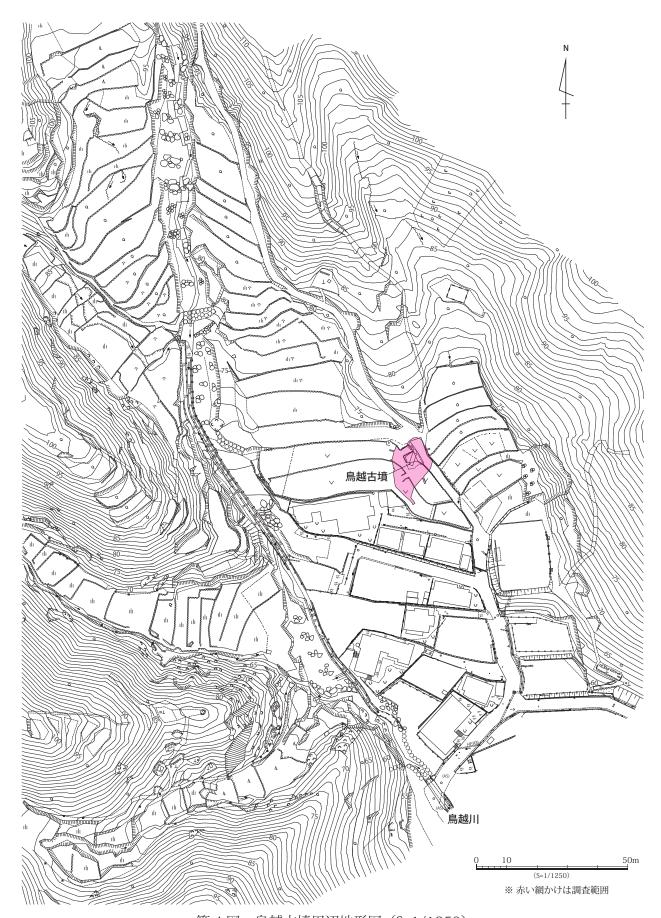
古墳の南側は畑の造成時に削平されており、羨道の石材もその際に取り除かれている。残存する石室南端から約 4m 南側には石垣が築造されて、下段の畑との境となっているが、畑造成前はこのあたりまで石室の石組が存在していたとのことである¹⁾。

石室内も農作業用資材を収める場所として使用されており、床面には資材やゴミが散乱している状態だった。また地元の方の話では、平成 26 年 10 月の台風時に残存する南端の天井石が落石したとのことで、約 $1.5 \times 1.0 \times 0.5$ m 大の天井石が石室開口部前に落下し、側壁石材もいくつか落下していた。

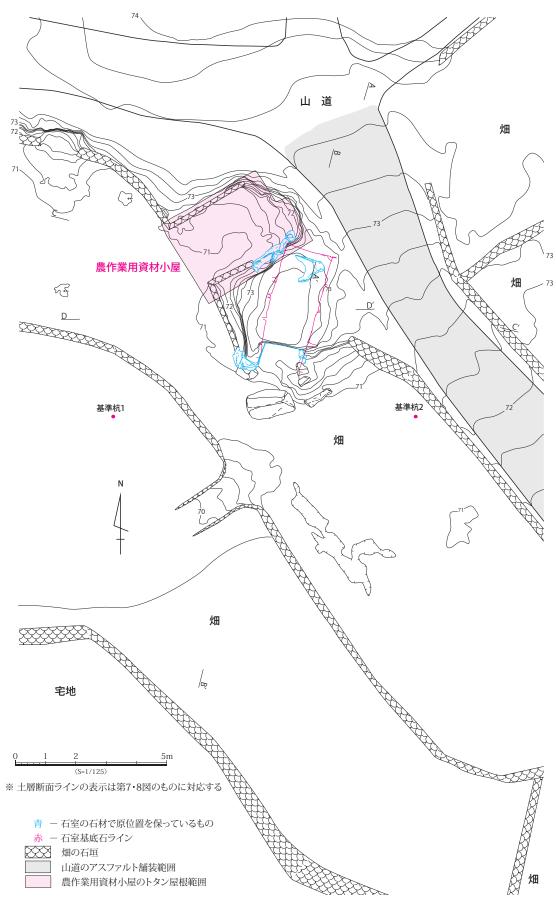
このように、調査前の時点で古墳墳丘の西面・南面が農作業用資材小屋と畑によって削平されており、東面・北面も山道による削平が想定された。さらに石室も羨道部が削平されており、地元の方の話では、畑の造成時に錆びた鉄刀や壺・器が出たとのことで、床面も撹乱されていることが予想された。

2 調査の概要(第6図)

調査は、残存する石室の中軸ライン B - B' と、これに直交し、かつ土層の削平を比較的受けていないライン C - C' を基準線とし、それぞれ土層観察用の試掘溝を設けた上で実施した。ただし、



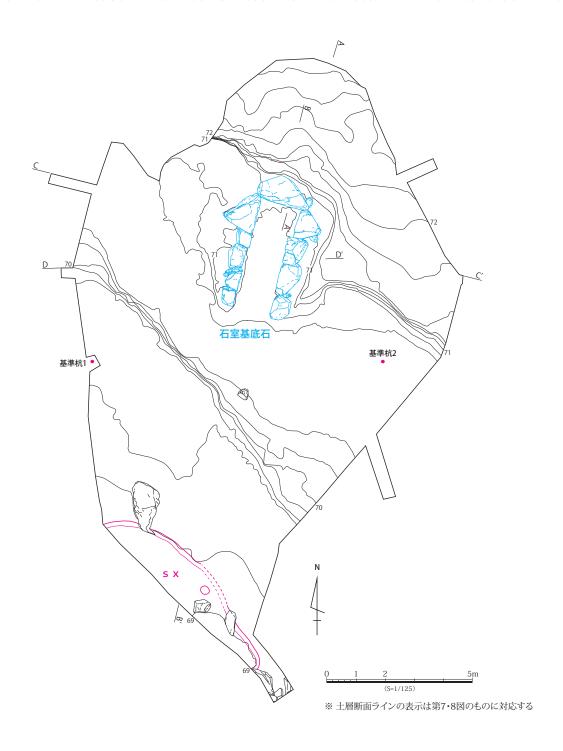
第4図 鳥越古墳周辺地形図(S=1/1250)



第5図 鳥越古墳実測図(調査前・S=1/125)

石室奥壁より北側と石室の西側は後世の削平により土層観察が困難であったため、試掘溝 A-A' と D-D' を設定した。

調査の結果, 墳丘はほとんどが削平され, 墳丘規模や墳形が判明する場所は残存していなかった。 埋葬施設は南南西方向に開口する横穴式石室で玄室部のみが残存し, 石室の本来の床面は畑の造成 や農作業用資材置き場となった時点で削平されていた。また石室南端から約8.3m南に壁を伴う平 坦面(SX)を1ヶ所確認した。遺物は石室床面や石室開口部付近の埋土中や調査区内から須恵器・



第6図 鳥越古墳実測図(調査後·S=1/125)

土師器・弥生土器・縄文土器・石器等が出土した。

3 古墳

(1) 基本層序・石室掘り方(第6・7・8・9図)

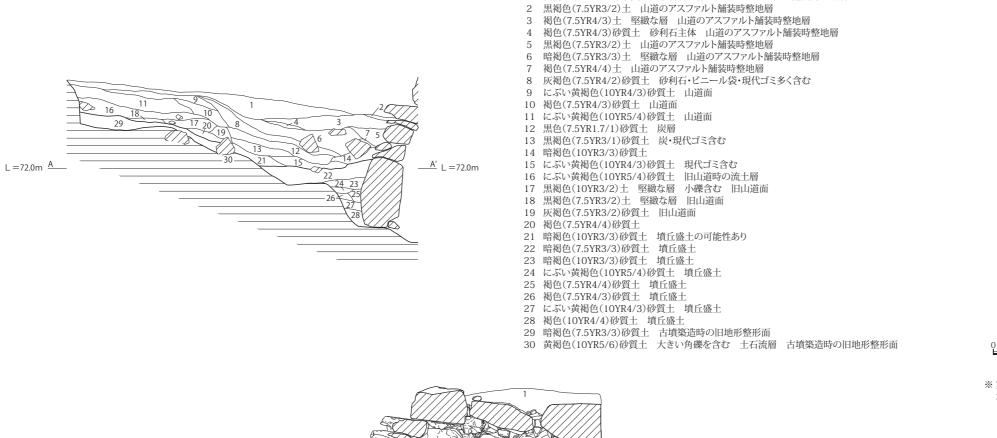
調査区北側・東側の土層観察では古墳築造に伴う旧地形整形面及び墳丘盛土の上に,旧山道面とそれに伴い現代ゴミの投棄・焼成や導水パイプが敷設された層(旧山道面:第7図 A - A'17~19層及び29層の一部,第8図 C - C'12~14層・ゴミ投棄層等:A - A'12~15層,C - C'7・8層),その後の流土等により形成された山道面とそれに伴い現代ゴミの投棄がされた層(山道面:A - A'16層と9~11層の2面,C - C'4~6層・ゴミ投棄層:A - A'8層),山道の拡張及びアスファルト舗装に伴い形成された層(A - A'1~7層,C - C'2~3層)の大きく分けて三段階の埋土状況が確認できた。埋土状況から,旧山道面が使用されていた時期には既に墳丘盛土の大半が流失していたと考えられる。

調査区西側・南側の土層観察では、石室基底石下面よりも低い位置で畑の耕作土層(第7図B-B'2・7層、C-C'11層、第8図D-D'4層)や耕作の影響を受けた層(B-B'8層、D-D'5・9層)が確認されており、畑の造成とそれに伴う石垣築造によって遺構面のほとんどが削平されていた。

残存する古墳築造に伴う旧地形整形面及び墳丘盛土は土石流層(A - A' 30 層, B - B' 17・18 層, C - C' 24 層, D - D' 12・13 層) と暗・黒褐色層(A - A' 29 層, B - B' 14~16 層, C - C' 23 層)上に形成されている。土石流層は D - D' 12 層が 13 層上に位置することに見られるように確認できた範囲で二回は堆積し、本古墳が立地する扇状地の基本層となっている。暗・黒褐色層は古墳築造までに繁茂していた植物などが分解して形成された層であると考えられる。これらの自然堆積層は畑や山道の造成により、部分的に削平を受けていた。その中で、古墳北側については山道により若干の削平はあるものの、掘り方との位置関係から築造時の地形に近いものであると考えられる。現状もふまえて築造時の地形を考察すると、概ね南南東方向への緩やかな緩斜面であったと想定できる。

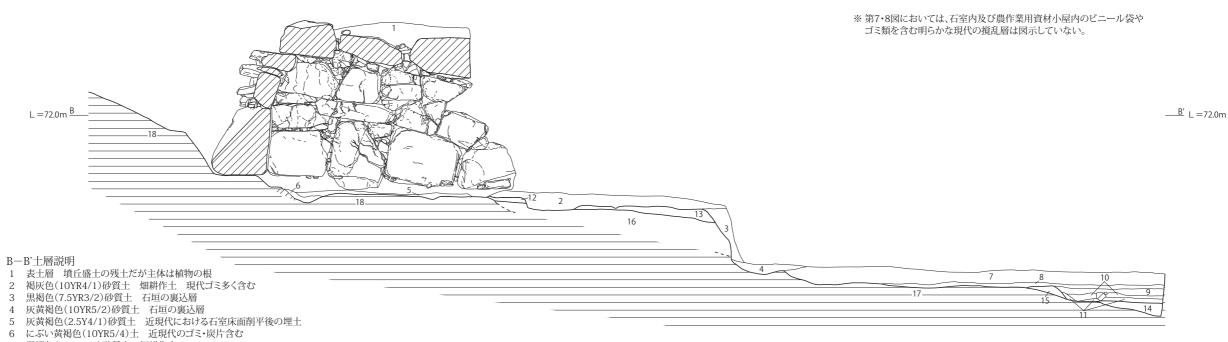
古墳の築造過程を想定すると、まず暗・黒褐色層を掘り込んで石室掘り方を造成している。掘り方は山道による削平の影響が考えられるものの、石室の北側では、南西から北東に約 1.4m のび、弧を描いて南東方向へ約 4.5m 続き、そこで角度を南西に変えて約 1.9m 続く。西側は資材小屋で、南側は畑によって消失している。石室の北側には東西約 2m、幅 0.25 ~ 0.75m の規模、最高所の標高 71.91m の三日月状の平坦面が存在する。平坦面の掘り方は最も高い位置で標高 72.48m 付近から掘削しており、平坦面との比高差は 0.57m である。この平坦面はそのレベルや位置から斜面の背面カットの痕跡である可能性も考えられる。

北側では平坦面から、東側では外側の掘り方より傾斜角度を急にして、さらに掘り込み石室を構築するための平坦面を形成している。内側の掘り方は、北側が東西約2.7m、東側が南北約4mの範囲で残存する。深さは奥壁側が最も深く0.69m、東側壁側は残存する中央付近で約0.45m、南端付近で0.24mである。土層観察から、東側壁側の掘り方は、南端までは原状をほぼ維持していると想定される。にもかかわらず南側に向けて浅くなっていくのは、元々の地形が傾斜面であった



A-A'土層説明

灰褐色(7.5YR4/2)砂質土 砂利石主体 山道のアスファルト舗装時整地層



第7図 土層断面図(南北・S=1/60)

18 黄橙色(10YR7/8)砂質土 土石流層 A-Aの30層と同一層 古墳築造時の旧地形整形面だが資材置き場として使用された時に一部削平されている

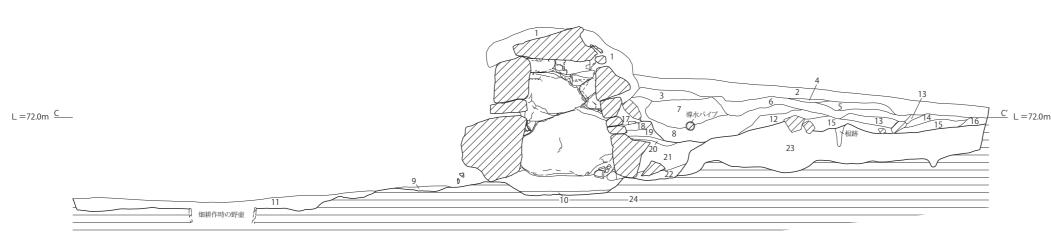
7 黒褐色(10YR3/1)砂質土 畑耕作土

10 黒褐色(10YR3/2)砂質土 11 暗灰黄色(2.5Y5/2)土

8 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土 粘る 耕作土下酸化層 9 にぶい黄褐色(10YR4/2)砂質土 やや粘る

12 黄褐色(10YR5/6)土 やや粘る 石材の落下等で撹乱されており、南側は畑造成時に削平され段となる

-20 -



- C一C'土層説明
 1 表土層 墳丘盛土の残土だが主体は植物の根
- 灰褐色(7.5YR4/2)砂質土 砂利石主体 山道のアスファルト舗装時整地層
- 3 灰黄褐色(10YR6/2)砂質土 山道のアスファルト舗装時整地層
- 4 明黄褐色(10YR6/6)砂質土 山道面
- 褐灰色(10YR4/1)砂質土 山道面
- 6 黄橙色(10YR7/8)砂質土 山道面 7 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土 導水用のビニールパイプ敷設 現代ゴミ多く含む

- 8 灰黄褐色(10YR4/2)土 現代ゴミ多く含む 9 褐色(10YR4/4)砂質土 資材小屋時の埋土 10 灰黄褐色(2.5Y4/1)砂質土 B-B'土層の5と同一層

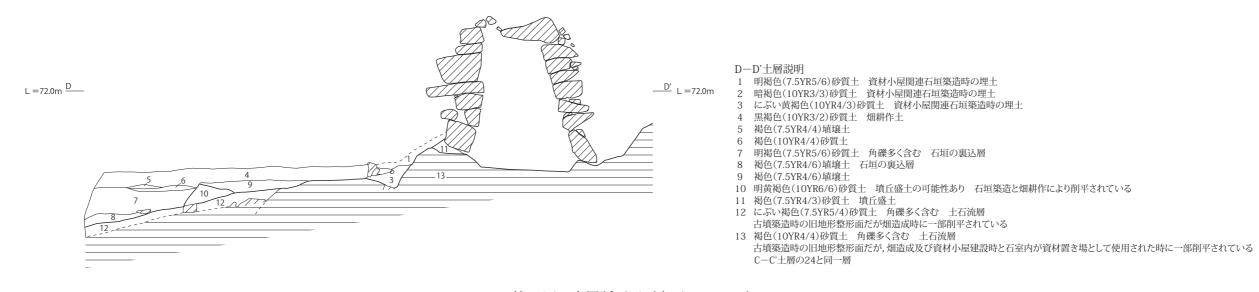
- 11 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土 畑耕作土 12 黄褐色(10YR5/6)砂質土 5~10cm大の角礫多く含む 旧山道面
- 13 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土 旧山道面
- 14 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土 旧山道面
- 15 黄褐色(10YR5/6)砂質土
- 15 寅梅巴(107R5/6)砂貞工 16 褐灰色(10YR4/1)砂質土 上段畑の石垣構築層 17 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土 墳丘盛土 18 にぶい褐色(7.5YR5/3)砂質土 墳丘盛土

- 19 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土 墳丘盛土
- 20 黒褐色(7.5YR3/1)土 墳丘盛土
- 21 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土 墳丘盛土
- 22 褐灰色(10YR4/1)砂質土 墳丘盛土

 23 黒褐色(10YR3/1)砂質土 灰黄褐色(10YR6/2)砂質土が所々に入る

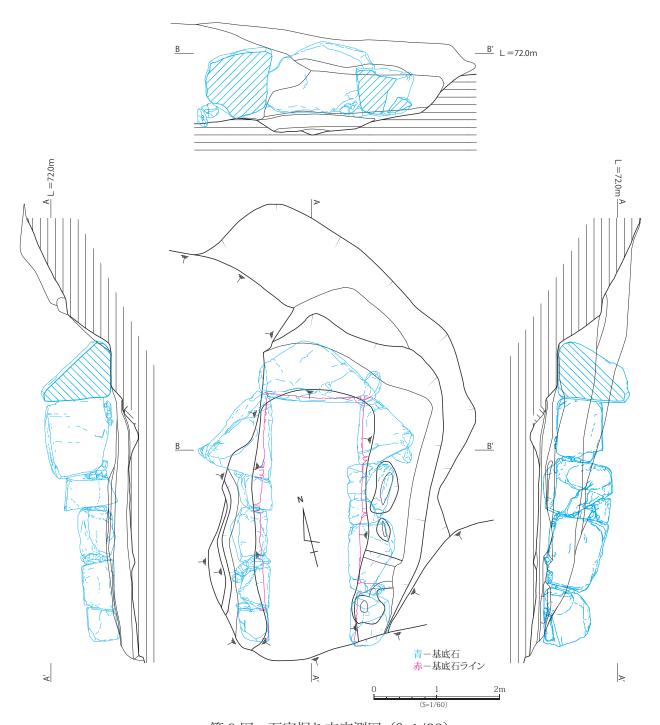
 古墳築造時の旧地形整形面 B-B'土層の16と同一層
- 24 浅黄色(2.5Y7/3 東側)·黄橙色(10YR7/8 西側)砂質土 土石流層 古墳築造時の旧地形整形面だが、畑造成及び資材小屋建設時と石室内が資 材置き場として使用された時に一部削平されている B-B'土層の18と同一層





第8図 土層断面図 (東西·S=1/60)

ために、平坦な整地面を形成した場合、自然にそうなったと考えられる。掘り方の深さの減少傾向や南端部の地形観察から、残存する基底石より若干南側までで掘り方は終息するものと想定される。掘り方に伴う整地面は、約2.7m×4.7mの範囲で確認した。ただし、整地面中央は、農作業用資材置き場として使用されたためか、中央の約1.8m×4.2mの範囲が掘り込まれ失われており、西側は資材小屋により、南側は畑により削平を受けており、本来の規模は判明しなかった。整地面の最高所は標高71.16mである。整地面の東側壁下には石室の基底石を据えたために生じた3つの穴と段差1箇所が確認できた。また南西側には幅約0.1m、南北約2mの帯状の平坦面を確認した。



第9図 石室掘り方実測図(S=1/60)

東側の整地面とは、高低差 0.08 m程度でわずかに段差があるが、基底石を据える際に生じたものと想定される。

ここで石室の奥壁と東側壁の基底石と石室掘り方との位置を見ると、ほぼ掘り方に沿って基底石が設置されている。西側壁については、掘り方は削平されているが、奥壁側から1石目の石材には本石室でも最大級の石材が使用されており、ある程度の深さの石室掘り方が大きく西側へ回りこんでいたと想定される。2石目以南の掘り方は、ラインを東側壁と同様に基底石に近づけた可能性もあるが、掘り方を掘削する際にあまり効率的とは思えない。また、東側壁側の掘り方は南に向けて浅くなっており、西側壁についても同様だったと考えられる。こうしたことから、石室掘り方は、東側壁側は基底石に近接し、西側壁側2石目以南は基底石から離れて、次第に浅くなり終息していくものと想定される。そのため、西側壁の西側には、基底石設置時の作業場、足場が存在したと考えられる。2石目以南の東側壁と西側壁の基底石を比較すると、東側壁側の方が大きく、掘り方も近接しているため、作業はこちらを優先させ、西側壁側を後に行う方が効率的であることも足場の存在を首肯させよう。

基底石設置後には、上段の壁や天井石の設置といった段階ごとに盛土がなされ、墳丘の構築がなされたものと想定されるが、古墳の盛土は石室裏込め部分の下層と天井石上のものだけしか残存せず、最大箇所でも約 1m の厚さしかない。A-A' $22\sim28$ 層,B-B' 1 層,C-C' $1\cdot17\sim22$ 層,D-D' 11 層がこれにあたるが、残存する層やその面的な検出状況からは墳形や墳丘規模を確認できなかった。また、これらの土層中に、版築を想定させるような堅く締まった層は確認できず、このことも盛土のほとんどが流失する要因であったと考えられる。

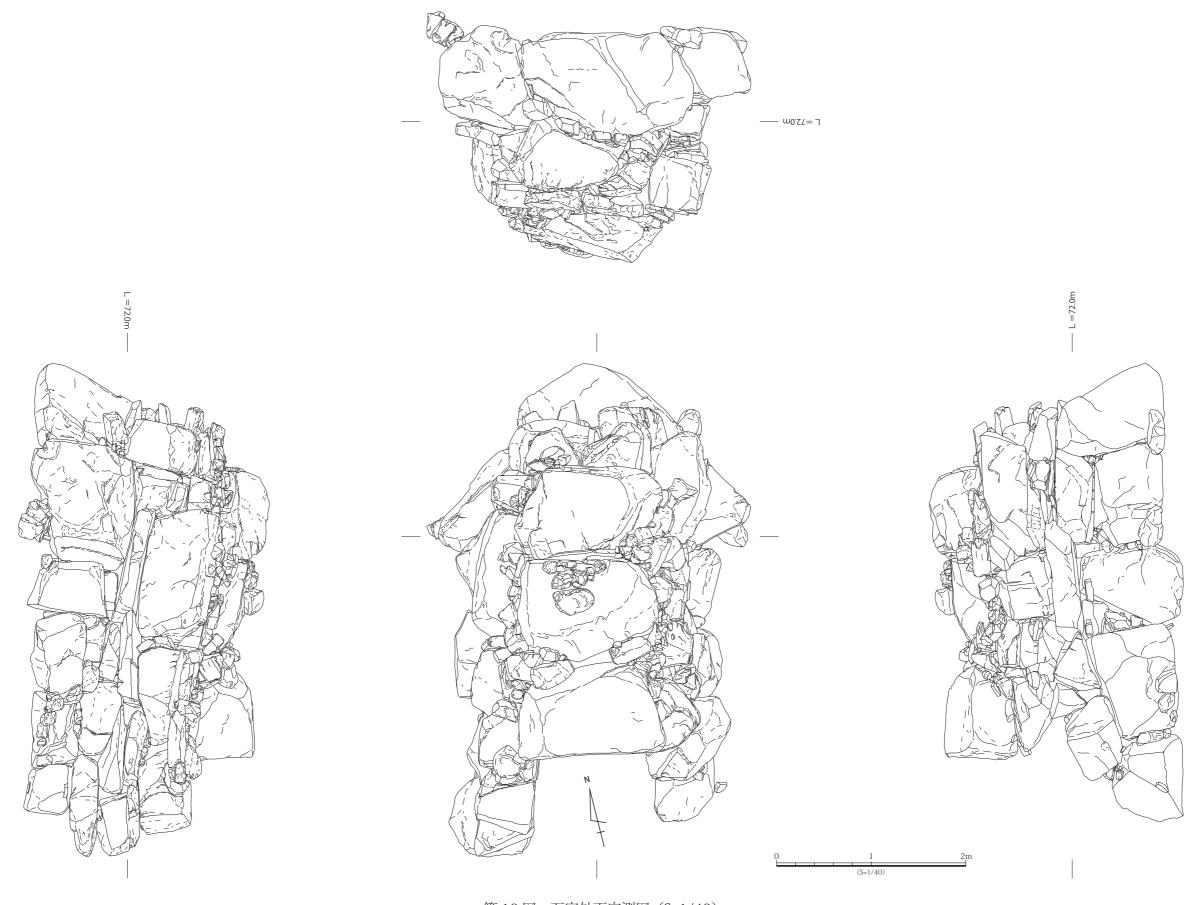
(2) 埋葬施設 (第10・11図)

埋葬施設は南南西方向(S14.65°W)に開口する横穴式石室で、花崗斑岩の割石を積み上げて築造している。鳥越川沿いには土石流などで運ばれた巨大な花崗斑岩が露頭しており、また調査区内の土石流層にもある程度の大きさのものが含まれており、これらの周辺の石材を利用したものと想定される。石室は畑の造成時に大きな改変を受けており、羨道石材もその時に取り外されたとされている。残存する石室では玄室と羨道を明確に区別できる施設が確認できなかった。ただし、石室の構造や畑造成時の石材解体の難易度を考え合わせると概ね羨道が撤去されて玄室のみが残されたものと考えられる。

床面については、基底石の下端レベルよりも低いレベルにある石室内埋土最下層(第7図B-B'6層)でも近現代のゴミや炭を含む層が検出されており、削平されていた。

石室の残存長は、東側壁 3.94m、西側壁 4.28m である。幅は、基底石の石室面の底辺ラインに基づいて計測すると、奥壁側で 1.54m、玄室の最大箇所で 1.59m、開口部側で 1.37m である。残存長をほぼ玄室の長さと想定すると玄室の幅と長さの比は、ほぼ 1:2.7 である。高さは石室床面が削平されているため、東側壁と西側壁での天井石下部と基底石下部のレベル差を平均すると、奥壁側で約 1.9m、開口部側で約 1.7m である。

先述したように畑造成前は古墳のある畑の南端までは石室石材があったとのことで、本来の石室



第 10 図 石室外面実測図 (S=1/40)



第 11 図 石室内面実測図 (S=1/40)

長は8m程度と想定できる。

また、天井石は本来 4 枚残存していたが、最南端の 1 枚が平成 26 年の台風時に落下して 3 枚が現存する。『佐東町史』には天井石落石前の石室の図面が掲載されている²⁾。それを見ると本来は、残存する東側壁の南端基底石上に石材を概ね 3 段積み上げている。また、基底石下端レベルよりも低いレベルの石材も図示されており、石室床面についても遅くともこの段階までには削平されていたことがわかる。

①天井石

石材の大きさは、奥壁側から 1 石目が幅 1.54m、奥行 0.9m、厚さ 0.53m、2 石目が幅 1.48m、奥行 1.07m、厚さ 0.38m、3 石目が幅 1.58m、奥行 0.95m、厚さ 0.62m である。1 石目から 3 石目に向けて、天井面は約 7.9°の傾斜で下がりつつ揃えている。また、天井石同士の間には 5 ~ 30cm 程度の隙間があり、そこには人頭大~こぶし大の石を詰めて石室への土の流入を防いでいる。特に 2 石目と 3 石目の間の東西両端は間隔が広く、東側には長さ 0.43m、幅 0.2m の石材、西側には長さ 0.44m、幅 0.24m の石材を詰めている。

2 奥壁

奥壁は石材の大きさや組み合わせから大きく三段階に区分できる。第一段階は、本石室でも最大級の石材を使用して基底に据えている。第二段階では、比較的大きめの石材を基底石の西側に積み上げ、東側の隙間を埋めるため石材を3段積み上げている。第三段階では天井石を受けるために、偏平な板石を2枚積んでいる。

壁面は、基底石は約85°の角度で立ち上がるが、その上段は約65°で内傾し、全体で見ると約75°の角度で石室側へ内傾している。そのため、最上段の石材は基底石のものより、0.48m石室側へせり出している。基底石下端から天井面までの高さは約1.93mである。

なお、壁を築く作業の後には、天井石の構架に合わせて、高さを揃えたり、天井石を安定させたりする目的で石材を据えたり、構架後に、天井石同士や壁の石材との間に生じた隙間を埋める目的で石材を詰めており、この作業はいずれの壁でも共通で行っている。また、これもどの壁でも言えることだが、主要な石材同士の隙間が大きい場合は、そこを埋めるためにいわゆる間詰石を多用している。奥壁においては外面で多用している。

各石材の詳細を見ると、第一段階の基底石は、石室内側に面した石材の最大面(以下、「大面」とする)が最大幅 1.57m、高さ約 1.05m の歪な七角形である。大面上側のラインは中央から西側にかけて大きく傾斜している。石材上面の形状は幅 0.7m、奥行 0.42m の三角形状、底面の形状は幅 1.86m、奥行 0.96m の三角形状で、概ね上面に向けてすぼんでいく。

第二段階の西側の石材は、幅 0.93m、高さ 0.79m の台形の大面を持ち、石室面からの奥行(以下、「控え」とする)が $0.35 \sim 0.46$ m である。大面下側のラインは基底石の傾斜に合わせる形で積まれている。この石材と基底石とが接するいわゆる合端部分は約 0.1m の幅しか無いため、石室外面

では基底石とこの石材の間に、いわゆる胴飼石としての役割を持つ長さ約0.4mの柱状の石材を2個はさみ、隙間にこぶし大の石材を詰めることで2段目を安定させている。2段目東側には石材を3段積んでいるが、幅約 $0.3 \sim 0.4m$ の石室側に向けた小口面(以下、「小面」とする)を持ち、控えが $0.43 \sim 0.7m$ の柱状のものである。

第三段階の東側の石材は幅 $0.54 \times$ 高さ $0.27 \times$ 控え 0.57m, 西側の石材は幅 $0.47 \times$ 高さ $0.23 \times$ 2.53m で、いずれも板石である。

③東側壁

東側壁は壁面を構成する基本となる石材を 3~5 段ほど積み上げているが、石材の組み合わせを見ると大きく三段階に区分できる。第一段階は基底石で、比較的大きめで高さのある石材を 4 個据えている。第二段階では、基底石上に比較的薄い石材を 1~2 段で積み、5 列が残っている。第三段階では、比較的大きめで高さのある石材を 1~3 段で積み、4 列が残っている。この基本作業の後に、天井石の構架に合わせて、高さを揃えたり、石を安定させるための石材を積んでいるが、奥壁側から並ぶ 4 個の石材はこの種のものの中では大きく、壁面を構成するものとなっている。東側壁は、残存長が 3.94m で、基底石石室内面の下端から最上段の石材上端までの高さが奥壁側 1.93m、開口部付近 1.7m である。壁面は、奥壁から約 0.9m の位置では、約 78° の角度で持ち送り状に立ち上がっている。最上段の石材は基底石のものより、0.29m 石室内へせり出している。

各石材の詳細を見ると、基底石である第一段階は、奥壁側から1石目が、幅0.9×高さ0.69mの四角形の大面を持ち、控えが0.87mである。2石目は最大幅0.88m、高さ0.86mの五角形の大面を持ち、控えが0.38mである。2石目の底部は石室内面から外面へ向けて最大0.2mレベルを下げており、整地面を掘り込んで据えられている。3石目は幅1.08×高さ0.78mの四角形の大面を持ち、控えが0.66mである。4石目は幅0.84×高さ0.49mの四角形の大面を持ち、控えが0.56mである。なお、2石目と3石目の隙間が大きいため、最大幅0.34m、高さ0.2mの台形状の小面を持ち、控え0.45mの間詰石を据えて横目地を通している。また、4石目は底面の中央部分が突出して平坦ではなく安定しないため、内面の南側下部に柱状の石材を詰めている。

第二段階の奥壁側から 1 列目は、1 段目が底辺 0.77m、高さ 0.35m の平行四辺形状の長手面を持ち、控えが 0.46m で、2 段目が底辺 0.58m、高さ 0.15m の平行四辺形状の長手面を持つ板石である。2 列目は、最大幅 1.16m、高さ 0.26m の逆台形状の長手面を持ち、控えが 0.33m である。3 列目は最大幅 0.47m、高さ 0.47m の五角形の小面を持ち、控えが約 0.6m である。4 列目は、1 段目に最大幅 0.13m、高さ 0.22m の台形状の面を持つ石材、2 段目に底辺 0.37m、高さ 0.32m の 三角形状の面を持つ石材である。5 列目は、幅 0.68×高さ 0.44m の逆台形の小面を持ち、控えが約 0.8m である。第二段階の上側のラインは、全体としては横目地が意識されていると考えられ、約 8°の傾斜で南に下がっている。

第三段階の奥壁側から 1 列目は、最大幅 0.92m、高さ 0.53m の歪な五角形の長手面を持ち、控えが 0.55m である。2 列目は、最大幅 0.65m、高さ 0.53m の台形状の大面を持ち、控えが 0.38m

である。3 列目は3 段積んでおり、1 段目が幅0.45m, 高さ0.17mの逆三角形の小面を持ち,控えが0.47m,2 段目が最大幅0.63m,高さ0.25mの逆台形の長手面を持ち,控えが0.28m,3 段目が最大幅0.48m,高さ0.22mの台形の長手面を持ち,控えが0.47mである。4 列目は,最大幅0.68m,高さ0.3mの逆台形の長手面を持ち,控えが0.54mである。

第三段階の石材と天井石の間に積んだ石材の中で奥壁側から並ぶ 4 石については、同種の石材の中で比較的大きめの $20\sim50$ cm 大であり、対面する西側壁との高さを揃えるために据えられたものと想定される。

4西側壁

西側壁は壁面を構成する基本となる大きめの石材を $3\sim7$ 段ほど積み上げているが,石材の組み合わせを見ると大きく四段階の作業が想定される。第一段階では,基底に本石室で,比較的大きめで高さのある石材を 5 個据えている。第二段階では,第一段階での石材の段差を補正するために,比較的小ぶりな石材を主体に $1\sim2$ 段で 4 列積んでいる。第三段階では,石材を $1\sim2$ 段で 5 列積んでおり,特に $2\sim4$ 列目には幅広の板石を使用している。第四段階では,比較的大きめで高さのある石材を主体に $1\sim2$ 段で 4 列積んでいる。

西側壁は、残存長が 4.28m で、基底石石室内面の下端から最上段の石材上端までの高さが奥壁側 1.87m、開口部付近 1.71m である。壁面は、奥壁から約 0.9m の位置では、約 84°の角度で持ち送り状に立ち上がっている。最上段の石材は基底石のものより、0.12m 石室内へせり出している。

各石材の詳細を見ると、基底石である第一段階は、奥壁側から1石目が、幅1.2×高さ0.9mの 五角形の大面を持ち、控えが1.0mである。この石材は三角柱状で、本石室で最大級のものである。 2石目は、最大幅0.49m、高さ0.78mの台形状の大面を持ち、控えが0.4mである。3石目は、最 大幅0.67m、高さ0.41mの歪な五角形の大面を持ち、控えが0.44mである。4石目は、最大幅0.79m、高さ0.5mの台形状の大面を持ち、控えが0.48mである。5石目は、最大幅0.48m、高さ0.45mの歪な五角形の大面を持ち、控えが0.45mである。この第一段階の上側のラインは、1石目が巨大であるため、揃っていない。

第二段階の奥壁側から1列目は、基底石2石目の上に積まれ、幅0.37×高さ0.11mの四角形の長手面を持つ柱状の石材である。2列目は、基底石3石目の上に2段積まれ、1段目が最大幅0.59m、高さ0.33mの四角形の大面を持つ石材である。基底石3石目の上面は外側から内側に向けて約0.14mのレベル差で下がるため、この石材の上面で傾斜を補正する役割も持たせている。2段目が最大幅0.47m、高さ0.2mの五角形の長手面を持つ石材である。3列目は、最大幅0.74m、高さ0.4mの五角形の大面を持つ石材である。4列目は、幅0.84m、高さ0.22mの南側が欠けた紡錘形の長手面を持つ、控えが0.84mの板石である。

第三段階の奥壁側から 1 列目は、基底石 1 石目の上に積まれ、最大幅 0.55m、高さ 0.48m の台 形状の大面を持ち、控えが 0.42m である。この石材は、奥壁第二段階西側の石材を支える形で組 まれている。2 列目は、最大幅 0.75m、高さ 0.24m の台形の長手面を持ち、控えが 0.88m の板石 である。石室内から見えるこの石材の最大幅は 1.07m であるが、南側は窪んでいる。3 列目は、幅 0.79m、高さ 0.18m の四角形の長手面を持ち、控えが 0.88m の板石である。4 列目は板石を 2 段積んでおり、1 段目は最大幅 0.72m、高さ 0.26m の歪な四角形の長手面を持ち、控えが 0.76m である。この板石は石室外面にかけて幅を大きく広げ、外面での幅は 0.94m である。2 段目は最大幅 0.77m、高さ 0.18m の歪な五角形の長手面を持ち、控えが 0.37m である。5 列目は、最大幅 0.39m、高さ 0.42m の逆台形の小面を持ち、控えが 0.59m である。第三段階の上側ラインは、1 列目以外はほぼ揃っている。また、2・3 列目と 4 列 1 段目には、比較的控えが長く、上面が平坦に広がる板石を使用しており、意識的に同様の石材を配置していると考えられる。ただし、4 列 1 段目の板石は、2・3 列目の板石の上面とは段差が生じている。また、4 列 2 段目の板石の控えは、1 段目の半分しかないため、控えの長い一体の平坦面は 2・3 列目のみで形成される。

第四段階の奥壁側から 1 列目は、奥壁に沿って 3 段積まれ、1 段目は幅 0.29m、高さ 0.12m の四角形の小面を持ち、控えが 0.5m、2 段目は最大幅 0.32m、高さ 0.22m の台形の小面を持ち、控えが 0.49m の柱状の石材、3 段目は 10cm 大の面を持つ 3 個の石材である。2 列目は、上辺 1.28m、下辺 1.2m、高さ 0.72m の逆台形状の大面を持ち、控えが 0.66m の直方体状の石材である。この石材は石室に使用されているものでも最大級の大きさである。3 列目は 2 段積まれ、1 段目が最大幅 1.01m、高さ 0.45m の歪な五角形の長手面を持ち、控えが 0.71m、2 段目が最大幅 0.5m、高さ 0.13m の歪な五角形の長手面を持ち、控えが 0.42m の板石である。4 列目は 2 段積まれ、1 段目が最大幅 0.79m、高さ 0.54m の部分的に欠けた逆台形の長手面を持ち、控えが 0.6m である。この石材の上面は、北側が幅 0.26m の範囲で段状に下がっている。この下がった面と 3 列目の石材の南端にかけて積まれた 2 段目は、最大幅 0.55m、高さ 0.12m の台形状の長手面を持ち、控えが 0.59m の板石である。第四段階の上端ラインは、ほぼ横目地が通っている。

5床面

床面は削平され、残存していなかった。ここで、石室掘り方に伴う整地面のうち、石室内側の見通しラインを見ると、奥壁側から開口部へ向けて、東側壁側で約4°, 西側壁側で約2°の傾斜で緩やかに下がっている。また、古墳築造時の基準層となる第7図B-B'16層のうち13層直下の範囲は、畑耕作の影響をあまり受けていない本来の傾斜に近いものと考えられ、約5.5°の傾斜である。本来の床面の傾斜も、これらの傾斜に近い形だったと考えられ、玄室内では水平気味に、羨道部では自然地形に合わせて緩やかに南に下がっていたものと想定される。

(3) 遺物出土状況(第11図)

本古墳では、古墳全体が削平されていることから出土遺物が限られており、いずれも小片である。 石室内からは須恵器の坏身(1)が出土している。床面は失われているため、原位置とは言えないが、本古墳に伴うものと想定できる。

石室開口部付近の埋土からは須恵器の坏身(2)と土師器の坏(10)が出土している。

その他, 南西側調査区からは須恵器の坏蓋(3)・須恵器片(7)が, 北側調査区からは須恵器片(5)

が出土している。これらが本古墳に伴うものかは不明だが、開口部よりレベルの低い位置にある南西側調査区の(3・7)は本古墳から流出した可能性が考えられよう。

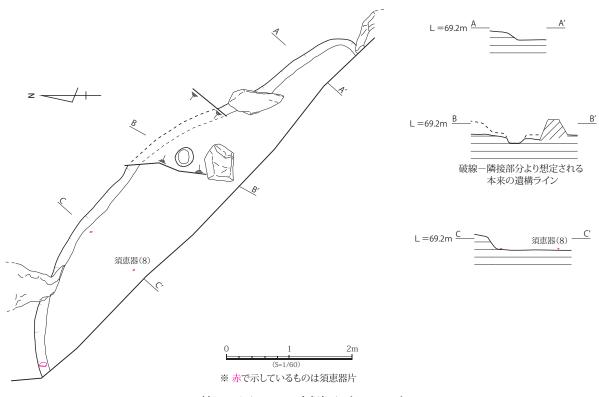
なお、時期的に明らかに本古墳に伴わない遺物には、弥生土器(11~16)や土師器(17)、須恵器の高坏(6)などがあるが、その多くは古墳東側の山道付近の埋土から出土している。周辺地形をふまえると、古墳北西から東へ緩やかに下る尾根筋から流入したものと考えられる。

4 その他の遺構 (SX・第12図)

S Xは古墳の石室残存部より南に約8.3m離れて位置する。南西側は畑と宅地の境にあたり、石垣が築かれて段差になっており、確認し得なかった。畑耕作土の下層の第7図B-B'15層から掘り込まれて平坦面を形成している。壁は、幅約7.2mの範囲で北西から南東に緩やかな弧状に延び、両端は調査区外に至る。残存する壁高は最高で20cmである。確認できた平坦面の最大幅は1.36mで、平坦面最高所は標高69.04mである。なお、壁を検出したB-B'15層の上層は畑造成時に17層と共に削平されており、本来の壁高は現状よりも高いものであったと考えられる。

平坦面のほぼ中央,壁側付近に底面形状が長径 22cm, 短径 17cm の長円形のピットを確認した。 底面標高は 68.88m である。調査範囲で確認できたピットはこれのみであり,配置については想定 できなかった。

遺構面からは須恵器片が3点出土している。うち図示できた1点(8)は中型の甕と考えられる。 埋土中からは須恵器片(4)・弥生土器の甕形土器(11)・縄文土器片(18)が出土している。遺 構面出土の須恵器は小片であるため、時期を特定しにくいが、残存部の特徴から後述する古墳に関



第 12 図 S X 実測図 (S=1/60)

わると考えられる須恵器の時期である7世紀第1四半期頃とそれほど時期差が無いものと考えて も矛盾は無い。

本遺構は、古墳から連続する土層が無いために断定はしにくいが、遺構面出土遺物の時期からは、 古墳とほぼ同時期に使用されていた可能性も考えられる。その場合、位置関係から古墳と関わる性 格を持つ遺構であることが想定される。

5 出土遺物(第13図)

出土遺物の特徴を述べる。個々の遺物の詳細については、後掲の観察表を参照されたい。

○須恵器

- 坏身(1・2・5)
- (2) の復元寸法は口径 9.4cm,受部径 11.6cm,器高 3.2cm である。(1)と(2)の立ち上がりは内傾した後,わずかに外側に屈曲し,内上方にのびる。立ち上がりは短く,(2)の端部は尖り気味に収める。(1)の端部先端は欠損しているものの,尖り気味に収めるものと想定される。受部は外反気味に外上方にのび,端部は丸く収める。体部は内湾し,(2)の底部は平坦で,ヘラ切り後,ナデを施している。これらの特徴から,田辺昭三氏による陶邑編年 3 の TK217 型式,中村浩氏による陶邑編年 4 の \mathbb{I} 型式 6 段階,向田裕始氏による芸備地方における須恵器編年 5 の \mathbb{I} 型式 3 段階にあたるものと考えられる。
- (5) は底部から体部にかけての一部のみ残存する小片であるため、器種については皿の可能性もあるが、残存する器厚や形状から坏 G^{6} にあたるものととらえたい。平底で口縁部は直立し外上方に立ち上がる。この特徴だけでは、時期を想定し得ないが、少なくとも田辺編年の TK48 型式、中村編年の III 型式 2 段階以降のものと想定される。

• 坏蓋 (3)

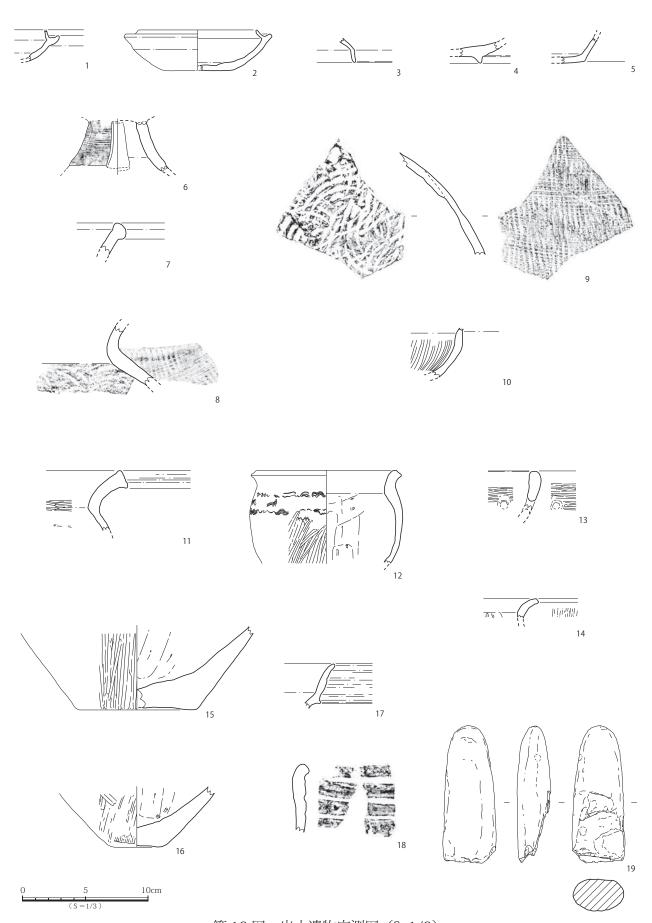
口縁部のみ残存する小片であるため、寸法は復元できないが、その形状から器高については 3 ~ 4 cm 前後と想定される。口縁部は比較的短めで、わずかに屈曲させて垂下に近い形で外下方にのびる。口縁端部は尖り気味に収める。この特徴から、田辺編年の TK217 型式、中村編年の II 型式 6 段階、向田編年の II 型式 3 段階にあたるものと考えられる。

• 甕(8)

頸部のみ残存する。頸部の復元径に基づいて口径を推定すると 20cm 前後となるため、中型の甕と考えられる。この特徴だけでは時期は想定できないが、坏類(1~3)と大きな時期差がないと考えても矛盾は無い。

• 高坏(6)

脚部の一部のみ残存する。残存部から長方形の透かし穴が3箇所程度開き、断面「ハ」の字状の短脚の脚部が復元できる。ロクロ回転によるナデの後でカキ目調整を行い、透かし穴の穿孔後には丁寧な面取りを行っている。これらの特徴から、田辺編年のTK208~23型式、中村編年のI型式3~4段階頃のものと考えられる。



第13図 出土遺物実測図(S=1/3)

· 器種不明 (4 · 7 · 9)

- (4) は底部から体部にかけての一部のみ残存する小片である。平坦な底部の端に垂下する短い高台を貼り付け、接地面は丸く収めている。この特徴から、器種は坏身や皿、盤などの可能性があり、早くても中村編年のⅣ型式 2 段階、向田裕始氏による広島県の 8 世紀の土器編年 ⁷⁾ の II 型式以降のものと想定される。
- (7) は口縁端部の一部が残存し、端部は玉縁状になっている。(9)は体部の小片である。叩き成形を施しており、外面には格子目風平行叩き目文、内面には同心円文が残る。外面にはその後で部分的にカキ目調整を行っている。いずれも器種は甕や横瓶などの可能性が考えられ、時期は想定できないが、坏類($1 \sim 3$)と大きな時期差がないと考えても矛盾は無い。

以上の須恵器の中で,出土状況から古墳に伴うと考えられる坏身(1・2)・坏蓋(3)・須恵器片(7)は、7世紀第1四半期頃の時期が想定できる。

その他のものを見ると、5世紀後半、7世紀後半以降、8世紀中葉以降の時期と想定できるものが断続的に出土している。

○土師器

坏(10)

体部から口縁部までの一部が残るが口縁端部は欠損している。体部は緩やかにカーブを描いて外上方に立ち上がり、端部に向けてわずかに屈曲して外反する。内面には放射状暗文を一段施している。残存部だけでは寸法を復元できないが、体部の形状から想定される器高は少なくとも $5 \, \mathrm{cm} \, \mathrm{UL}$ 、口径は $10 \, \mathrm{cm} \, \mathrm{UL}$ である。これらの特徴から、いわゆる「畿内産土師器」 $8 \, \mathrm{m} \, \mathrm{m}$ であり、器種は坏 $10 \, \mathrm{UL}$ にあたるものと考えられる。

○土器(弥生土器・土師器)

本遺跡から出土した土器について、特徴的なものについて時期を追って見てみたい。

• 弥生時代後期

甕形土器(11)の口縁部の接合は屈曲点近くで行われており、内面には接合の際に余った屈曲点直下の粘土をへう削りした痕跡が確認できる。また、口縁部屈曲点から口縁端部に至る器厚はそれほど変化せず、端部付近を強くつまんで肥厚しているように見せている。端部の一部には 2 条の凹線を施している。また、土器(15)の底部は、わずかに窪み底で、内面底までへう削りがなされ、胴部にかけて直線的に外上方へ立ち上がり、急激に器厚を減じる。これらの特徴を有するものは後期前葉のものと考えられる(若島一則氏による広島湾沿岸における弥生時代後期土器編年の $\Pi-1$ 期 $^{10)}$)。

甕形土器(12)は口縁部屈曲点から口縁端部に至る器厚はそれほど変化しない。口縁部の接合は屈曲点近くで行われており、内面には、接合の際に余った屈曲点直下の粘土をヘラ削りした痕跡が確認できる。胴部最大径は想定される器高の下から3分の2あたりの位置にある。土器(16)

の底部は、わずかに窪み底で、内面底までヘラ削りがなされ、胴部にかけて直線的に外上方へ立ち上がる。これらの特徴を有するものは後期中葉のものと考えられる(II-2-10期)。

土器(14)の口縁部は、接合が屈曲点近くで行われており、内面には接合の際に余った屈曲点直下の粘土をヘラ削りした痕跡が確認できる。また、口縁端部に至るまでに強く外湾し、器厚がわずかに減じている。これらの特徴を有するものは後期末葉のものと考えられる(II-3期)。

碗形土器と考えられる土器(13)は、口縁部が内湾しつつ立ち上がり、端部にかけて器厚を増し、端部はわずかに平らに収めている。これらの特徴だけでは時期は限定できないが後期の範囲に入るものと考えられる(Ⅱ期)。

• 古墳時代初頭

甕形土器と考えられる土器(17)は、二重口縁を持ち、口縁下段の端部は拡張部の基部より横方向へ鋭く突出する。拡張部は外湾しつつ外上方に立ち上がり、外面には強いヨコナデにより凹腺がめぐっている。これらの特徴を有するものは山陰系土器の大木権現山式土器 ¹¹⁾ にあたるものと考えられる。

○縄文土器

• 土器片(18)

口縁部の一部が残存するが、傾きが想定できなかったため、第13図では便宜上、直立させて図示している。口縁部は緩やかに内湾しつつ立ち上がって、端部に至るまでに強く外湾し、端部は丸く収めている。外面には横方向に平行に3条の沈線文を施している。残存する小片の幅は約6cmであるが、弧状にならず平坦であり、口縁部全体の形状や口径規模を想定し得なかった。このことから大きめの器か、大きく内屈もしくは外反する口縁部を持つ器の可能性が考えられる。これらの特徴からは型式は限定できないが、縄文時代後期末葉から晩期前半頃のものと考えられる。

○石器

• 石斧 (19)

磨製の円筒石斧である。片面の中央付近から刃部にかけて 5.4cm の範囲が剥落している。剥落 後も何らかの形で使用を続けており、刃部先端全体が欠損している。特徴からは縄文時代後期から 晩期頃のものと考えられる 120。

注

- 1) 福谷昭二「第二章 佐東町のあけぼの」『佐東町史』広島市役所 1980年
- 2) 1に同じ
- 3) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年 以下,田辺編年はこれによる。
- 4) 中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房 1991年 以下,中村編年はこれによる。

- 5) 向田裕始「芸備地方における須恵器生産(1) 古墳時代を中心として-」『芸備古墳文化論考(芸備第 15 集)』 芸備友の会 1985 年 以下,向田編年はこれによる。
- 6) 松村恵司「近畿地方の7世紀前半の土器」『日本土器事典』雄山閣 1996年
- 7) 向田裕始「広島県(瀬戸内中部 I) の8世紀の土器」『日本土器事典』雄山閣 1996年
- 8) 暗文を施した土師器に代表される畿内産土師器について、安間拓巳氏は広島県内の出土例を検討され、地元の生産品もあると想定されている。本古墳出土のものも、畿内産である確証はないため、いわゆる「畿内産土師器」と表記している。
 - 安間拓巳「広島県出土の暗文土師器」『芸備第30集』芸備友の会 2002年
- 9) 6に同じ
- 10) 若島一則「広島湾沿岸における弥生時代後期土器等に関する一考察」『研究連絡誌 I 』財団法人広島市文化 財団 2002年 以下,在地系土器編年は若島氏の編年による。
- 11) 高下洋一「大木権現山式土器」『日本土器事典』雄山閣 1996 年
- 12) 早川正一「磨製石斧」『縄文文化の研究7 道具と技術』雄山閣 1995年

第2表 出土遺物観察表

([]:復元値)

番号	器 種	出土位置	寸 法 (cm)	器形	調整・成形	備考
須惠	思器					
1	坏身	石室床面削 平面		た後、わずかに屈曲し、 内上方へのびる。受部 は外反気味に外上方にの び、端部は丸く収める。	ロクロ回転による ナデの後一部ユビ	焼成:良好 色調:灰白色,一部灰色
2	坏身	開口部前面 埋土	受部径 [11.6]	立ち上がりは短く内傾した後、わずかに屈曲し、内上方へのびる。端部は尖り気味に収める。受部は直線的に外上方にのび、端部は丸く収める。体部はわずかに内湾しつつ直線的にのび、底部は平坦である。	よるナデ,底部へ ラ切り後ナデ 内面:体部ロクロ回転に よるナデ,底部ナ	焼成:良好 色調:灰白色
3	坏蓋	南西側調査区内		体部下位からは直線的に 口縁部に至る。口縁部は わずかに屈曲させて垂下 し、端部に至る直前でわ ずかに外湾する。端部は 尖り気味に収める。	内外面:ロクロ回転によるナデ	胎士:精緻 焼成:良好 色調:灰白色 ロクロ右回転。
4	器種不明	SX埋土		底部から体部下位に向けて直線的に外上方に立ち上がる。底部は平坦で端に垂下する短い高台を貼り付け,接地面は丸く収める。		胎士:精緻 焼成:良好 色調:灰色 ロクロ左回転。
5	坏身?	北側調査区内		「く」の字状に内反し, 体部下位は直線的に外上		干含む
6	高坏	東側調査区内		短脚の脚部は断面「ハ」 の字状を呈する。長方形 と想定される透かし穴痕 跡がある。		焼成:良好 色調:灰色,一部青灰色

番号	器 種	出土位置	寸 法 (cm)	器形	調整・成形	備考
7	器種不明	南西側調査 区内		口縁端部は玉縁状に上下 に肥厚する。	内外面:ロクロ回転によ るナデ	焼成:良好 色調:外面 - 灰色 内面 - 灰白色 ロクロ右回転。内面の一
8	甕	SX		口縁部は「く」の字状に 外湾する。	外面: 口縁部ロクロ回転 によるナデ, 体部 上位叩き成形(平 行叩き目文)の後 ロクロ回転による カキ目調整 内面: 口縁部ロクロ回転 によるナデ, 体部 上位叩き成形(青 海波文)	焼成:良好 色調:灰白色
9	器種不明	東側調査区内		体部は緩やかに内湾する。	外面: 叩き成形(格子目 風平行叩き目文) の後, 一部カキ目 調整 内面: 叩き成形(同心円 文)	若干含む
土部	下器(古墳関 道	重)				
10	坏	開口部前面 埋土		体部から口縁部まで緩や かに内湾しつつ外上方に 立ち上がり、端部に向け てわずかに屈曲して外反 する。	内面体部に放射状暗文を	胎土:精緻 焼成:良好 色調:橙色
弥生	土器					
	甕形土器	SX埋土		外反し、端部は上下に肥厚しつつ平らに収める。	内面: 口縁部ナデ, 口縁 屈曲部へラ磨き, 胴部上位へラ削り 後ナデ 口縁端部の一部にナデに よる2条の凹線が残る。	砂粒含む 焼成:良好 色調:明赤褐色
12	甕形土器	南東側調査区内	胴部最大径	口縁部は「く」の字状に 外反しつつ立ち上がり, 端部は平らに収める。体 部は内湾しつつ立ち上が る。	上位ナデ、胴部へ	む 焼成:良好

			1				
番号	器 種	出土位置	寸	法 (cm)	器形	調整・成形	備考
13	碗形土器?	西側調査区内			口縁部は内湾しつつ立ち上がり、端部にかけてわずかに内傾する。端部は平らに収める。		む 焼成:良好
14	器種不明	東側墳丘盛 土内			口縁部は「く」の字状に 外反し、端部は平らに収 める。	外面:口縁部上位ナデ, 口縁部下位ハケ目 調整の後ナデ 内面:口縁部ナデ,胴部 上位へラ削り	焼成:良好 色調:橙色
15	器種不明	東側調査区内	底 1	圣 [9.4]	底部から胴部下位にかけ て直線的に外上方に立ち 上がる。底部は窪み底。		砂粒含む
16	器種不明	東側調査区内	底 1	圣 4.4	底部から胴部下位にかけて直線的に外上方に立ち上がる。底部は窪み底。	胴部下位ハケ目調	粒多く含む
土的	器						
17	甕形土器?	東側調査区内					
縄戈	工土器						
18	器種不明	S X埋土			口縁部はわずかに内湾しつつ立ち上がり、端部にかけて外湾する。端部は丸く収める。	外面に3条の沈線文を施	胎土: 0.5 ~ 1mm 大の 砂粒含む 焼成:良好 色調:にぶい褐色,一部 橙色
石器	2						
19	石斧	南東側調査区内	残存! 最大! 最大! 重	福 4.2 享 2.6	円筒石斧		一次欠損の後も何らかの 使用をしており二次欠損 を生じている。

IV まとめ

1 石室構築の手順

本古墳の石室側壁構築の作業を大きく分類すると、①大きめで高さのある基底石を据える工程(両側壁第一段階)、②比較的薄い石材を使用して基底石の大きさ・形状の差から来る上端のレベル差を解消する工程(東側壁第二段階、西側壁第二・三段階)、③天井石を受けるために比較的大きめで高さのある石材を積む工程(東側壁第三段階、西側壁第四段階)とに分けられる。②の石材が薄いのは、列に応じて1~3段で積み上げることでレベル差を微調整する意図の表れと見ることができよう。ところで、②にあたる西側壁第三段階には特徴的な控えの長い板石が用いられている。この上には、③工程にあたる本石室でも大きめの石材が積まれていることから、それぞれの作業は次の工程を意識して計画的に行われたと考えられる。

ここで奥壁、東側壁、西側壁の構築順について想定してみたい。掘り方や石材の組み合わせから、まず奥壁の基底石を最初に据え、順に奥壁側から側壁の基底石を据えたと想定できる。Ⅲ章-3-(1)でも述べたとおり、西側壁の整地面西側には側壁構築時の作業場、足場が存在したと考えられる。また、東側壁と西側壁の基底石を比較すると、概ね東側壁のものが大きい。このことから、掘り方が深く石材との間隔が狭い東側壁側から基底石を据え、石室内側で調整作業をした後に、広い作業スペースのある西側壁側の基底石を据え、石室内外から調整作業をする方が効率的である。上段に関しては、石材の組み合わせや土層観察の結果をふまえると、同工程ごとに奥壁→側壁の順に段を積み上げながら盛土をしたものと想定される。ところで、天井石構架前に側壁同士のレベル差を調整するために据えられた石材と考えられるものは、東側壁の奥壁側から並ぶ4石である。ここで、西側壁第四段階の主要石材の積み上げ後に東側壁第三段階の石材を積み、石材上面レベルの差から調整の必要が生じたとする考え方もあろう。しかし、調整石材は不定形なものが天井石の据えられる要所のみに置かれており、むしろ東側壁第三段階の石材を積んだ後、西側壁第四段階の石材を積んだ結果として生じたレベル差を急きよ解消したものと考える方が合理的である。この考え方を是とするなら、側壁構築の順番は、掘り方が盛土で埋まった後も東側壁が先行したものと考えられる。

2 古墳の時期と追葬回数の推定

本古墳は、床面が完全に削平され、副葬品の出土状況も原状を維持したものが無いため、その時期や追葬回数は判断が難しいが、わずかに出土した遺物により、検討をしてみたい。

Ⅲ章 - 3 - (3) 及びⅢ章 - 5 で述べたが,出土状況から本古墳に伴うものと考えられる遺物の特徴を見ると,須恵器は,田辺昭三氏による陶邑編年 $^{1)}$ の TK217 型式,中村浩氏による陶邑編年 $^{2)}$ の II 型式 6 段階,向田裕始氏による芸備地方における須恵器編年 $^{3)}$ の II 型式 3 段階にあたり,7 世紀の第 1 四半期頃のものと想定される。一方,土師器(10)は,いわゆる「畿内産土師器」であり,飛鳥 II 期 $^{4)}$ のもので 7 世紀中葉頃のものと想定される。

ここで、須恵器と土師器の間に若干の時期差があることをどう捉えるかだが、伝世した型式の古い須恵器を埋葬時に使用したという考え方もあろう。ただ、古墳に伴うと考えられる須恵器は、い

ずれも小片で、位置的にみて掻き出されたと考えられるものが3点(2・3・7)、石室内でもおそらく深い位置にあったために、近代の床面削平による掻き出しをも免れたと想定される坏身(1)が1点しかない。畑造成時に石室内から錆びた鉄刀や壺、器が出たという話を合わせて考えると必ずしも最終埋葬時の遺物とは断定できないものである。こうした理由から少なくとも1回は追葬が行われ、埋葬期間は7世紀前半頃と推定したい。

3 古墳の立地と位置付け

鳥越古墳は、鳥越川が形成する扇状地の扇頂付近に存在しているため、この扇状地に基本となる生産基盤を持つ集団によって築かれたと想定される。この扇状地を臨む後期古墳としては、鳥越川の左岸に本古墳と上山古墳 50 が、右岸に四本寺古墳群が、いずれも近接する尾根と扇状地の境付近に立地しているが、沖積平野から見ると本古墳が扇状地緩斜面の最奥部・最高所となる。また、この中では、四本寺古墳群 60 のみが群をなし、本古墳、上山古墳はそれぞれ独立している。もちろん開発などで近接する古墳が破壊された可能性もあるが、そうした伝承はなく、本古墳周辺の現状景観からは古墳があったような痕跡は見当たらない。緑井地区で他に横穴式石室を埋葬施設とする古墳には宇那木神社古墳があるが、

これも独立して築かれている。

これらの古墳の中である程度,実態 が判明している四本寺第1号古墳は、 径 15 m程度の墳丘を持ち、石室内の 長さ7.3 m,幅1.88 m,高さ1.7 m である。この数値は土が流入した状態 のものであり、本来の規模はもう少し 大きくなると考えられる。出土した須 恵器の特徴により6世紀中葉から後 葉のものと想定されている。一方、本 古墳は、玄室内の最大幅 1.59m、長 さ約4mで, 削平前の石室想定全長 が約8mであることから、墳丘規模 も 10 m程度はあったと考えられる。 四本寺第1号古墳と比較すると古墳 規模では劣り、推定築造時期は後にな る。

さらに、本古墳と周辺地域の同時期 の古墳とを比較してみたい。まず、古 墳の規模に注目するが、その際に墳丘 や石室の破壊、副葬品の盗掘等を考慮

第3表 石室幅比較表

(数値は少数第一位まで表示)

		(外間(5/ 数/)	5一位まで表示)				
	地域	古墳名称	宿室 [玄室] 幅				
			(m)				
広島湾岸							
		鳥越古墳	1.6				
	安佐南区緑井地区	四本寺第 1 号古墳	1.9				
		宇那木神社古墳	1.8				
		別所古墳	1.3				
		天井林第2号古墳	1.5				
	安佐南区八木地区	足谷第 1 号古墳	1.3				
		小原山第 1 号古墳	1.2				
		小原山第 2 号古墳	1.2				
	安佐南区安古市地区	鶏頭原古墳	1.9				
		上組古墳	1.6				
	安佐南区祇園地区	部谷山第 1 号古墳	1.8				
		部谷山第 2 号古墳	1.8				
	生化小区 专阻44区	真亀第3号古墳	1.2				
太田川下流域	安佐北区高陽地区	平野神社古墳	2.0				
		上ヶ原第2号古墳	1.7				
		上ヶ原第7号古墳	1.6				
		上ヶ原第 13 号古墳	1.6				
		上ヶ原第 18 号古墳	2.1				
		上ヶ原第 22 号古墳	1.6				
		原迫第 1 号古墳	1.7				
	安佐北区可部地区	給人原第 1 号古墳	1.8				
		給人原第2号古墳	1.6				
		給人原第3号古墳	2.0				
		給人原第 4 号古墳	1.7				
		給人原第8号古墳	1.6				
		その他の可部古墳群	00 15				
		の古墳	$0.8 \sim 1.5$				

	地域	古墳名称	石室 [玄室] 幅 (m)	
		畝観音免第1号古墳	1.9	
	安芸郡海田町	畝観音免第2号古墳	2.0	
深田乙口(法村忠	安芸区船越地区	新宮古墳	1.5	
瀬野川流域		北尾古墳	1.4	
	安芸区矢野地区	千古古墳	1.5	
		千古下古墳	古墳名称 (m) 観音免第 1 号古墳 1.9 観音免第 2 号古墳 2.0 宮古墳 1.5 尾古墳 1.4 古古墳 1.5 古下古墳 1.4 草原第 1 号古墳 0.9 草原第 2 号古墳 0.9 草原第 4 号古墳 0.9 草原第 5 号古墳 1.2 草原第 6 号古墳 1.2 田古墳 1.6 木平古墳 2.9 九第 1 号古墳 2.1 九第 2 号古墳 2.0 年代古墳 後室 1.9 大道第 1 号古墳 2.0	
		栄草原第 1 号古墳	1.8	
		栄草原第2号古墳	0.9	
八幡川流域	佐伯区五日市地区 佐伯区五日市地区	栄草原第 4 号古墳	0.9	
八幡川孤峨	佐田区五口中地区	栄草原第 5 号古墳	1.2	
		栄草原第6号古墳	1.2	
		和田古墳	1.6	
安芸南東部				
		梅木平古墳	2.9	
		貞丸第 1 号古墳	2.1	
沼田川流域	三原市本郷町	貞丸第2号古墳	2.0	
		御年代古墳 前室	2.2	
		御年代古墳 後室	1.9	
賀茂川流域	竹原市新庄町	横大道第 1 号古墳	2.0	
貝以川流域	打房印制庄町	横大道第2号古墳	2.2	

計測数値は『広島県遺跡地図 X (広島市)』(広島県教育委員会 2004 年)・『広島県史 考古編』(広島県 1979 年)を参照した。

ただし部谷山第 $1\cdot 2$ 号古墳は、脇坂光彦「広島湾周辺の横穴式石室と安芸国の成立」 『考古論集-河瀬正利先生退官記念論文集-』(河瀬正利先生退官記念事業会 2004年)から、可部古墳群は、井手三千男 / 善入義信『可部古墳群-目で見る給人原古墳群-』(はにわ会 1974年),広島県立可部高等学校『はにわ第 $2\sim 13$ 号』(広島県立可部高等学校 1963 ~ 1974 年)からとった。

すると、現状で比較が可能なのは、石室(玄室)の幅であるため、これを比較したものが第3表である。

この数値を見ると、広島湾岸の後期 古墳の中で,本古墳の石室規模は最大 級のものではないが、全体で見た場合、 比較的大きなものといえる。ただし、 安芸地域で最大級の石室規模を持つ古 墳は幅 2m を超えているが、広島湾岸 では畝観音免第2号古墳ぐらいであ る。同様に,広島湾岸の太田川下流域 の前・中期古墳には、特筆すべきもの は多いが、安芸地域全体の最大級の古 墳と比較して、規模のみを見ると小さ いものであり、その理由を脇坂光彦氏 は「広い沖積地を形成しなかったため、 より強大な豪族が育成されなかったこ と」と想定されている⁷⁾。そうしてみ ると,太田川下流域の古墳規模は,前・ 中期から後期まで大きく状況を変えて いないともいえよう。

次に古墳の分布から本古墳と周辺地域の古墳とを比較してみたい。

緑井・八木地区で確認されている前・中期古墳の分布を見ると、八木地区は少なく、緑井地区の方が圧倒的に多い。また、緑井地区のものには、宇那木山第2号古墳や神宮山第1号古墳といった広島湾岸を代表する前期古墳が含まれている。それをふまえて、後期古墳の分布傾向を見ると、八木地区では、前・中期古墳と比較すると数が増加し、扇状地斜面上に2~3基程度で群をなして分布している。一方、緑井地区では数が減少し、独立して分布している。ただ、古墳単体での石室規模を見ると、緑井地区のものが優位である。

太田川下流域西岸の祇園地区や東岸の高陽・戸坂地区では、緑井地区と同様に、前期・中期古墳と比較すると後期古墳数は減少し、独立もしくは2~3基程度で築かれている。一方、太田川を挟んで八木地区の北側に位置する可部地区では、後期になると古墳数が大きく増加し、3~10基程度のまとまりを持つ支群で構成される群集墳が形成され、総数80基以上となっている。

こうした傾向をどう捉えるかだが、独立して分布する古墳は、太田川下流域内では石室規模が大きなものであることもふまえ、地域の首長層もしくは有力家長層が前代より集約もしくは縮小し、その層のみが築ける前・中期古墳の性格を引き継ぐものと考えられる。一方、数が多く群を成すものは、集団内での家長と傍系親族といった関係や擬制的同族関係などを反映した、より広範囲の階

層が築ける後期群集墳の様相を持つものとも捉えられよう。本古墳は前者にあたると考えられるが、その場合、同一の生産基盤を持つと考えられる四本寺古墳群や上山古墳の被葬者との関係が課題になる。四本寺第1号古墳と本古墳との間には時期差があり、集落内での有力家長層の交代や墓域の変更などの可能性も考えられるが、現状では判断材料が少ないため、今後の調査成果を期待したい。

また、八木地区の場合は、前・中期古墳と比較した後期古墳の急激な増加という観点で見ると、可部古墳群ほどではないものの、緑井地区よりもむしろ可部地区に近い状況といえる。可部古墳群の成立要因としては、従来から畿内政権との密接な関わりが考えられている。八木地区の別所古墳では発掘調査が行われているが、副葬品に鉄滓が含まれているため、鍛冶を生産基盤とした鉄の交易に関わる被葬者像が想定されており⁸⁾、畿内政権との密接な関わりが十分に考えられるだろう。

一方、本古墳からは、暗文の施された土師器が出土している。暗文土師器は太田川下流域では、可部古墳群で少なくとも5点出土しており⁹⁾、広島湾岸では最大規模の石室を持つ安芸郡海田町の畝観音免第1号古墳で4点¹⁰⁾、本古墳のものより時期は下るが安芸郡府中町の下岡田遺跡から1点¹¹⁾、佐伯区五日市町の下沖2号遺跡から7点¹²⁾出土している。いずれの遺跡も律令体制確立期の畿内政権との深い関係が想定され、下岡田遺跡や下沖2号遺跡は官衙と捉えられている。調査成果からは、本古墳の被葬者像は想定し得ないが、暗文土師器=畿内文化の受容という点で見れば、密接な畿内政権との関わりがあったと言えよう。

今回の調査で、畿内との密接な関係を想定し得る地域が、可部・八木・緑井地区と広がりを見せたことは、律令体制移行期の太田川下流域の状況を考える上で示唆に富む事例になったといえる。とはいえ、現状では調査事例が少なく、八木・緑井地区の弥生時代から古墳時代にかけての政治的・経済的な動向を考えるには今後の調査研究の蓄積を待つほかない。

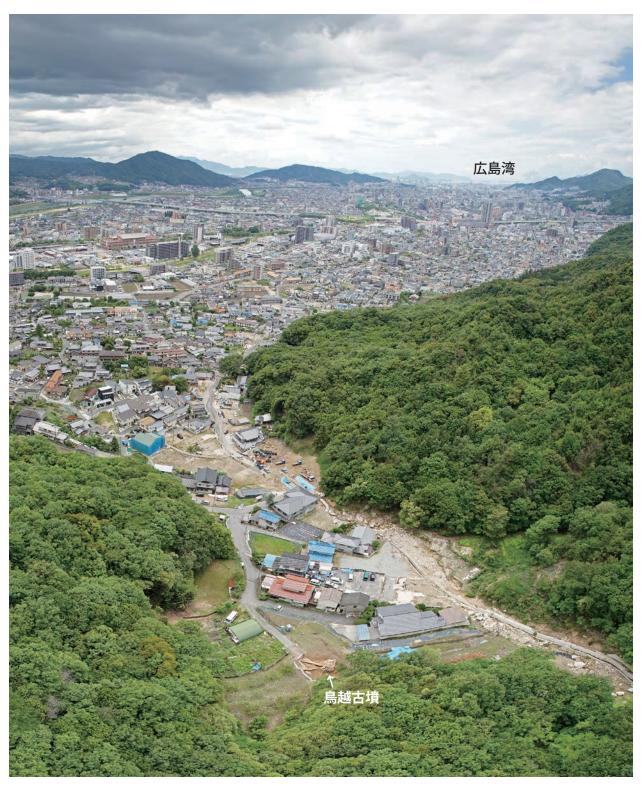
注

- 1) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年
- 2) 中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房 1991年
- 3) 向田裕始「芸備地方における須恵器生産(1)-古墳時代を中心として-」『芸備古墳文化論考(芸備第 15 集)』 芸備友の会 1985 年
- 4) 松村恵司「近畿地方の7世紀前半の土器」『日本土器事典』雄山閣 1996年
- 5) 上山古墳は第1表でも触れたように、実態や位置については疑義がある。しかしながら、『広島県遺跡地図 X (広島市)』(広島県教育委員会 2004年)には「上山古墳」・「シンナシ古墳」ともに横穴式石室を埋葬施設とするとあり、いずれにせよ鳥越古墳の南東に後期古墳の存在を想定したい。
- 6) 四本寺古墳群を踏査してみたが、第2号古墳は確認できなかった。
- 7) 脇坂光彦「広島の古墳 その地域的特色 」 『探訪・広島の古墳』脇坂光彦・小都隆 1991年
- 8) 財団法人広島市文化財団『別所古墳発掘調査報告』 2010年
- 9) 給人原第 8・9 号古墳, 上ヶ原第 1・2・34 号古墳でそれぞれ 1 点ずつ計 5 点が出土している他, 出土古墳 不明のもの 1 点がある。
 - 広島県立可部高等学校『はにわ 第9号』 1970年

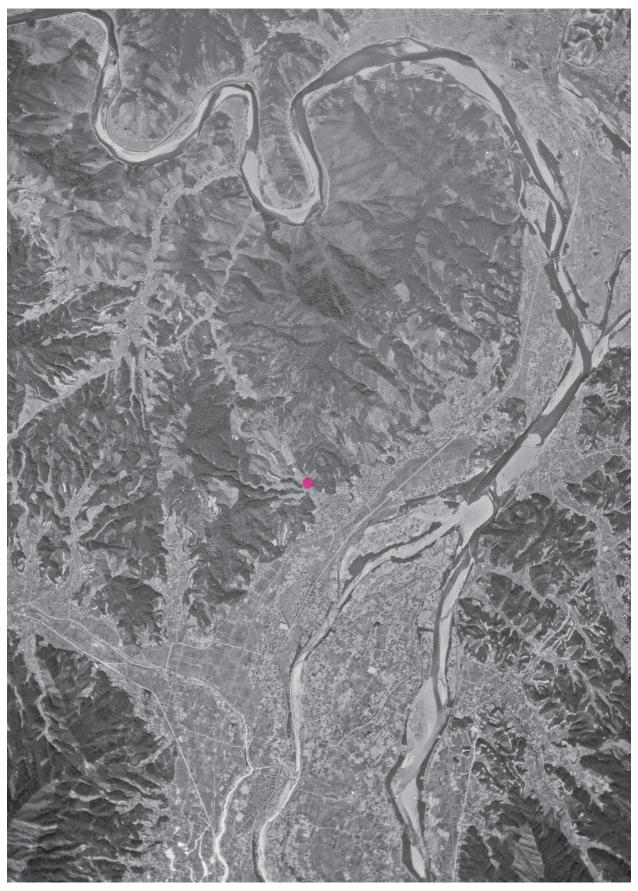
広島県立可部高等学校『はにわ 第12号』 1973年 広島県立可部高等学校『はにわ 第13号』 1974年 財団法人広島市未来都市創造財団『上ヶ原遺跡・上ヶ原第34号古墳』 2011年

- 10) 広島県安芸郡海田町『海田町史 資料編』 1981 年
- 11) 安間拓巳「広島県出土の暗文土師器」『芸備第30集』芸備友の会 2002年
- 12) 財団法人広島市歴史科学教育事業団『下沖2号遺跡発掘調査報告』 1994年

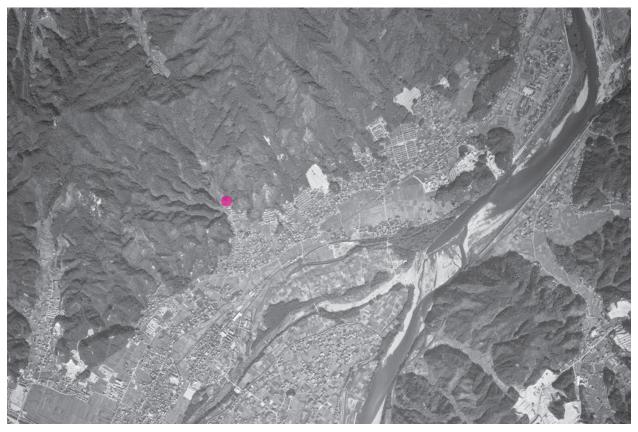
図 版



鳥越古墳上空から市街地を望む(航空写真・石室検出時・北から)



昭和 23 年 (1948) 撮影 八木・緑井地区周辺広域空中写真(赤丸-鳥越古墳所在地)



a 昭和 41 年 (1966) 撮影 八木・緑井地区空中写真(赤丸-鳥越古墳所在地)



b 昭和 49 年 (1974) 撮影 鳥越古墳周辺空中写真(赤丸-鳥越古墳所在地)



a 鳥越古墳と権現山・阿武山(航空写真・石室検出時・南から)



b 鳥越古墳近景(航空写真・石室検出時・南から)



a 鳥越古墳近景(航空写真・石室検出時・東から)



b 鳥越古墳近景(航空写真・石室検出時・西から)



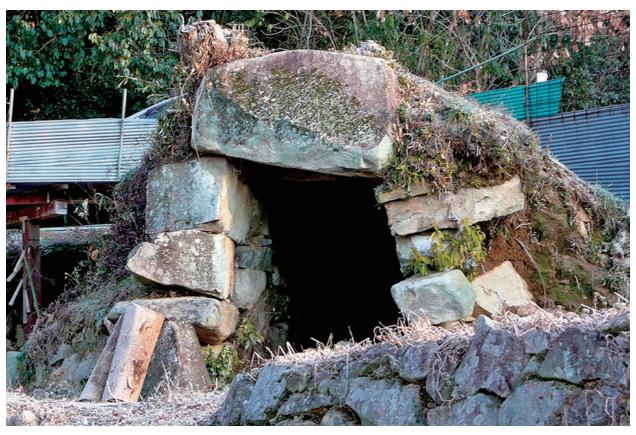
a 調査前全景(南から)



b 調査前全景(南東から)



a 調査前石室開口部(南から)



b 天井石落石前(平成 24 年頃撮影・南から)



a 墳丘除草及び山道撹乱層撤去後(南から)



b 墳丘除草及び山道撹乱層撤去後(南東から)



a 墳丘除草及び山道撹乱層撤去後(西から)



b A - A' 土層(北西から)



a A-A'土層南側下層(西から)



b B-B'土層石室内(南東から)



a B-B'土層開口部前面(南東から)



b B - B' 土層南側 (西から)



a C - C' 土層東側(南から)



b D - D' 土層 (南東から)



a 石室検出後(航空写真・石室検出時・俯瞰 南から)



b 石室検出後(航空写真・石室検出時・南西から)



a 石室検出(南から)



b 石室検出(南東から)



a 石室検出(東から)



b 石室検出(北東から)



a 石室検出(西から)



b 石室検出(北西から)



a 石室検出(北から)



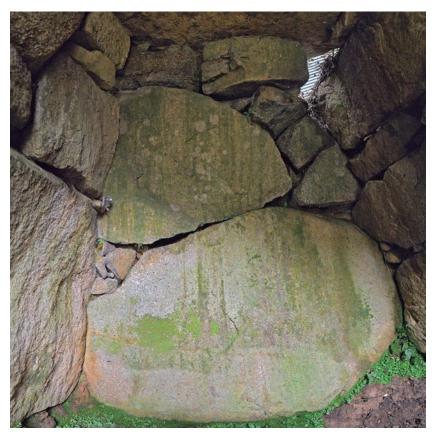
b 石室奥壁外面(北から)



a 石室東側壁外面(東から)



b 石室西側壁外面(西から)



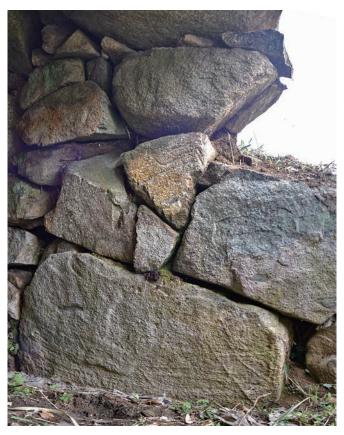
a 石室奥壁内面(合成・南から)



b 石室東側壁内面(調査前・南西から)



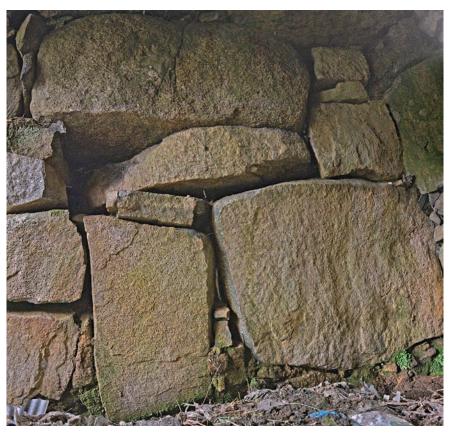
a 石室東側壁内面奥側(合成・南西から)



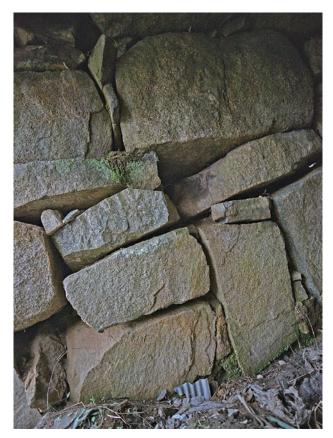
b 石室東側壁内面開口部側(合成・西から)



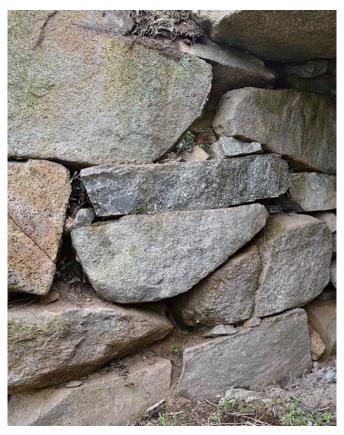
a 石室西側壁内面(調査前・南東から)



b 石室西側壁内面奥側(合成・東から)



a 石室西側壁内面中央(東から)



b 石室西側壁内面開口部側(合成・南東から)



a 石室基底石検出(南から)



b 石室基底石検出(南から)



a 石室基底石検出(南東から)



b 石室基底石検出(東から)



a 石室基底石検出(北東から)



b 石室基底石検出(南西から)



a 石室基底石検出(西から)



b 石室基底石検出(北西から)



a 石室基底石検出(北西から)



b 石室基底石検出(北から)



a 石室掘り方検出(南から)



b 石室掘り方検出(南東から)



a 石室掘り方検出(西から)



b SX(南東から)



a SX (北西から)



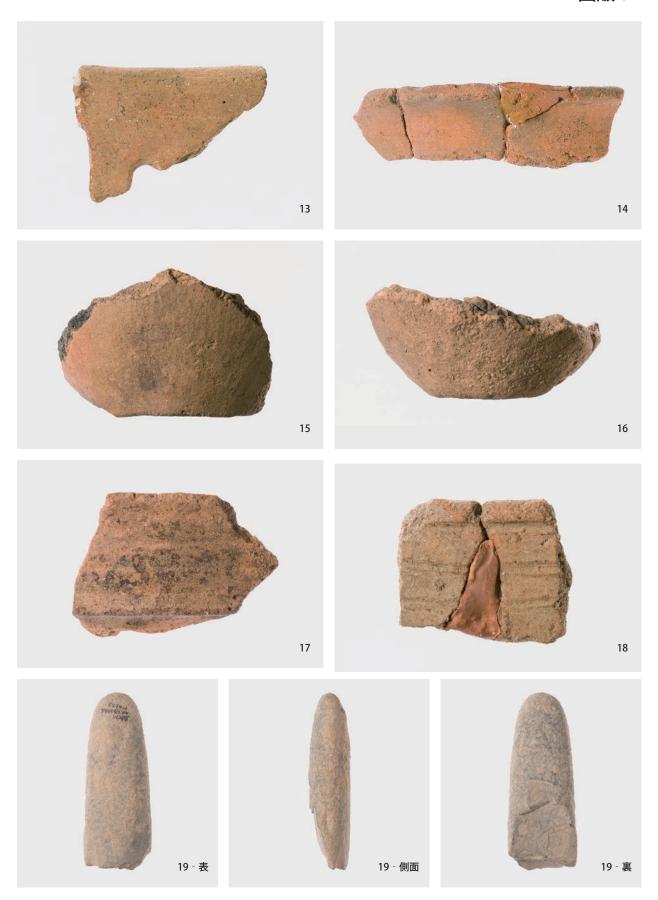
b 石室基底石及びSX(北西から)



出土遺物(1)



出土遺物(2)



出土遺物(3)

報告書抄録

ふりがな	とりごえこふん -ひろしましあさみなみくみどりいはっちょうめしょざい-									
書名	鳥越古墳 一広島市安佐南区緑井八丁目所在一									
副書名										
シリーズ名	公益財団	公益財団法人広島市文化財団発掘調査報告書								
シリーズ番号	第3集	第3集								
編著者名	田村規	田村 規充								
編集機関	公益財団	公益財団法人広島市文化財団 文化科学部 文化財課								
所在地	〒 732	〒 732 - 0052 広島県広島市東区光町二丁目 15 番 36 号								
発行年月日	西暦 20	西暦 2017 年 2 月 8 日								
ふりがな	ふり		コード			北緯		調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所有	E 地	市	町村	遺跡番号	0 / /	"	M-1-EL/Y11F4	иль.щіх	H/12E///\
とりごえ こ ぶん 鳥越古墳	できしまけんひさしました。 広島県広島市安 さみなみくみどりいはっ 佐南区緑井八 ちょう日		34	105	_	34° 28′ 50″	132° 28′ 57″	20150511 ~ 20150715	300 m	広島西部山系 緑井地区砂防 工事に伴う埋 蔵文化財現地 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	代	主な遺構			主な遺物		特;	記事項
鳥越古墳	古墳	古墳時 後期	代言	設とする	石室を埋葬施 る古墳1基 う平坦面(S ケ所		須恵器・土師器・弥 生土器・縄文土器・ 石器			

要約

7世紀前半頃に営まれたと想定される横穴式石室を埋葬施設とする古墳である。須恵器や暗文土師器片などが出土した。

(公財) 広島市文化財団発掘調査報告書 第3集

鳥越古墳

-広島市安佐南区緑井八丁目所在-

2017年2月

編集発行 公益財団法人広島市文化財団 文化科学部 文化財課

〒 732 - 0052 広島市東区光町二丁目 15番 36号

TEL 082 - 568 - 6511

印 刷 株式会社中本本店

〒 730 - 0004 広島市中区東白島町 13番 15号

TEL 082 - 221 - 9181